

9. 平城京跡（左京三条二坊三坪）の調査 第535次

事業名	賃貸住宅・事務所・個人住宅新築	調査期間	平成17年9月7日～9月14日
届出者名	個人	調査面積	64㎡
調査地	奈良市三条大路一丁目607番地3	調査担当者	武田和哉

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条二坊三坪の北東隅に該当し、調査地周辺の過去の調査例から、三坪は坪全体を一括利用した宅地が推定されている。

II 基本層序

上から造成土（約0.9m）、黒褐色粘質土（約0.15m 旧耕土）、灰褐色土（約0.1m 旧床土）、灰褐色砂質土（約0.05m）、黄灰褐色土（約0.1m）、茶褐色土（約0.15m 遺物包含層）、茶褐色土（約0.1m 整地層）と続き、現地表下約1.5mで黄灰褐色土またはシルトの地山にいたる。遺構面は地山上面で、標高は概ね60.0mである。

III 検出遺構

検出遺構には、旧流路跡1条（SD01）、掘立柱列2条（SA02-03）、素掘り溝がある。詳細は遺構一覧表の通り。

IV 出土遺物

今回の調査では、遺物整理箱約1箱分の遺物が出土。



HJ 第535次調査 発掘区位置図 (1/5000)

大平を奈良時代の土器と瓦の破片が占める。また、帯金具（丸軋）1点がSA02の北から2番目の柱穴から出土。

V 調査所見

今回検出したSD01は、断面観察からみて、掘立柱穴より古く、奈良時代よりも以前の遺構である可能性が有るが、出土遺物がなく時期は不明である。（武田和哉）



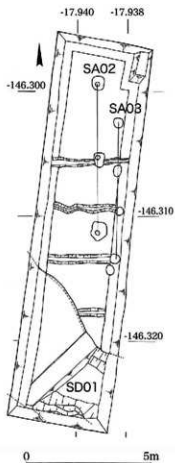
発掘区全景（北から）



発掘区全景（南から）

HJ 第535次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	形状		主な出土遺物	備考	
	延路方向	平面規模 (m)			深さ (m)
SD01	北西→南東	長さ5.5以上×幅3.0前後	時期不明の土器等の破片が1点出土	発掘区内では、約4m分を検出。南界は発掘の南辺でかろうじて検出でき、幅員は3m前後と推定される。検出面からの深さは約1.1m。掘立柱穴より古い。	
遺構番号	柱列方向	間隔 (柱間)	柱間全長 (m)	柱間寸法 (m)	備考
SA02	南北	2以上	6.0以上	3.0	柱穴深さ0.3～0.5m・建物の一部の可能性あり
SA03	南北	3	5.4	1.8	柱穴深さ0.3m前後・建物の一部の可能性あり



HJ 第535次発掘区遺構平面図 (1/150)

10. 平城京跡（左京五条二坊二坪・五条条間路）の調査 第536次調査

事業名	ショールーム付修理工場建設	調査期間	平成17年9月15日～10月8日
届出者名	川西建設株式会社	調査面積	330㎡
調査地	奈良市大安寺町521-1、521-2	調査担当者	中島和彦・武田和哉

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条二坊二坪の南辺と五条条間路上にあたる。周辺では過去に市HJ第20次と第383次調査が行われ、五条条間路とその南に隣接する三坪内の様相が一部判明した。五条条間路は道路幅が溝心で約9.0m、路面幅が6.2mである。一方、三坪内は東西に宅地が2分割され、中小規模の掘立柱建物群等を検出した。また、古墳時代の井戸、土坑も確認した。今回の発掘調査は、五条条間路と、古墳時代以前の遺構の確認を目的として実施した。

II 基本層序

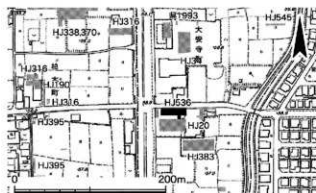
発掘区内の層位は、東側で0.8～1.2mの造成土の下に、耕土、明灰色砂質土、灰色砂質土とつづき、灰色砂の地山となる。地山面はほぼ平坦で標高は約57.4mである。遺構検出は地山上面で行った。

III 検出遺構

古墳時代以前の遺構、奈良時代の遺構、中近世の素掘り小溝がある。なお遺構番号は、市HJ第20次・同第383次調査からの続き番号とした。

古墳時代以前の遺構 掘立柱建物3棟、溝1条がある。掘立柱建物の詳細は下表に記す。いずれも建物主軸が東に振れることなどから、古墳時代以前の建物と考えられるが、時期を決定づける出土遺物はない。溝SD11は幅1.6～3.0m、深さ0.3～0.55mで、南側が深い。発掘区外の南北へと続き、埋土は上から明黄褐色粘土と灰色砂質土である。出土遺物がなく時期不明である。

奈良時代の遺構 五条条間路と掘立柱1条がある。五条条間路SF101は、北側溝SD102を約34m分、南側溝SD103を約1.5m分検出した。路面上は地山のままである。北側溝SD102は幅1.95～3.0m、深さ0.3～0.5mで、東側が深くその先の菟川方面に排水していたと考えられる。埋土は2層に大別され、上から灰色粘土、灰色砂質土である。出土遺物には奈良時代後半～末の土器・瓦類があり、ほとんど灰白色砂質土から出土した。溝心



HJ 第536次調査 発掘区位置図 (1/5000)

の国土座標値は、X = -147,343.56、Y = -17,972.00である。南側溝SD103は、北側の肩があふれのためか道路側に広がり、それを合せて幅約3.9mにもなるが、この部分を除くと、溝の規模は幅約1.6m、深さ約0.6mである。溝からは奈良時代後半の土器が少量出土した。溝の最深部の国土座標は、X = -147,352.60、Y = -17,971.30で、市HJ第20次調査で確認した南側溝心の数値と近い値を示す。以上の点から、五条条間路は道路幅が溝心間約9.0m、路面幅が4.8～6.7m、両側溝心からの道路心位置はX = -147,348.08、Y = -17,972.00となる。掘立柱列SA119は二坪南端にあり、北側溝SD102と平行し、発掘区外の東側へと続く。詳細は検出遺構一覧表に記す。

IV 出土遺物

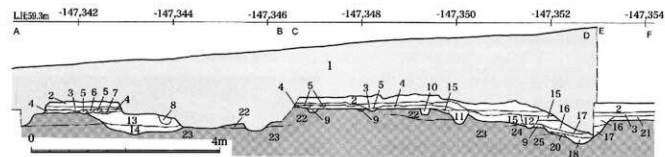
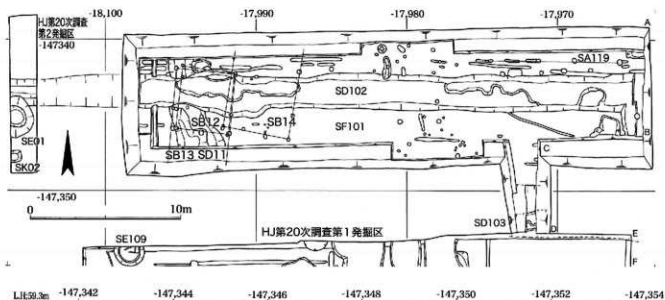
遺物整理箱4箱分が出土した。土器類が2箱分、瓦類が2箱分あり、その大半がSD102から出土した。内訳は、奈良時代後半～末の土器器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・蓋・皿・壺・甕、製塩土器2点、土馬9点、円盤形土製品1点、古墳時代の須恵器杯、弥生土器、軒瓦1点（型式不明）、丸瓦40点（3,075g）、平瓦89点（10,525g）、丸平不明瓦20点（485g）、鉄滓1点、ガラス滓1点、砥石1点、砂岩製白石1点、太型蛤歯石弁1点がある。

V 調査所見

調査では、五条条間路と古墳時代以前の遺構を確認し、従来の調査成果を裏付けるものとなった。（中島和彦）

HJ 第536次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	種 (列) 方向	規模		梁間全長		桁行柱間寸法		梁間柱間寸法		備考
		(桁行・梁間)	m	m	m	m	m	m		
SB12	南北	3×2	4.0	3.5	1.3-??	1.7-1.8			SB13より古い	
SB13	南北	3以上×2	4.0以上	3.9	??-1.3	2.0-1.9			SB12より新しい	
SB14	南北	3以上×3	4.0以上	4.4	1.6-??	1.4-1.5-1.5				
SA119	東西	3以上	8.8		3.4-2.4-3.0					



- | | | | | |
|-----------|-------------|------------|--------------------|-----------|
| 1: 造城土 | 6: 暗灰色砂質土 | 11: 茶灰色粘質土 | 16: 暗灰色粘質土 | 21: 明灰色細砂 |
| 2: 黄土 | 7: 明灰色粘質土 | 12: 灰色砂質土 | 17: 暗灰色粘質土 (褐色土含む) | 22: 灰色砂 |
| 3: 明灰色砂質土 | 8: 暗灰色粘質土 | 13: 灰色粘土 | 18: 暗灰色粘土 | 23: 明褐色粘土 |
| 4: 灰色砂質土 | 9: 暗灰色粘質土 | 14: 淡灰色砂質土 | 19: 茶褐色砂質土 | 24: 灰色砂 |
| 5: 灰色砂質土 | 10: 淡茶灰色砂質土 | 15: 灰色粘質土 | 20: 茶褐色砂質土 | 25: 褐色粘土 |

HJ 第 536 次調査 遺構平面図 (1/250)・発掘区東壁土層断面図 (1/80)



発掘区全景 (西から)



発掘区全景 (東から)

11. 平城京跡（左京五条六坊二坪）の調査 第537次

事業名	済美小学校校舎建設事業	調査期間	平成17年10月3日～11月2日
届出者名	奈良市長	調査面積	400㎡
調査地	奈良市西木辻町5-2	調査担当者	宮崎正裕・安井宣也

I. はじめに

本調査地は、平城京の条坊復原では左京五条六坊二坪の南西隅に該当し、西端には東五坊大路が位置する。

II. 基本層序

基本層序は、上から造成土、旧耕土・床土と続き、現地表下約0.6mで黄褐色粘砂の地山にいたる。遺構検出は地山上面で行った。地山上面は東から西へ低くなり、標高は70.2～70.6mである。発掘区内は、旧校舎の基礎によって遺構面が広範囲にわたって損なわれていた。

III. 検出遺構

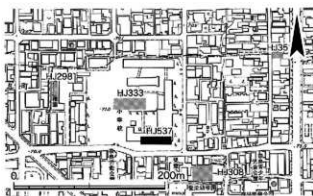
古墳時代後期の溝1条（SD01）、土坑3基（SK02～04）と奈良時代の溝2条（SD05・06）、土坑3基（SK07～09）を検出した。遺構の詳細は下表の通りで、SK02の埋土の花粉分析を実施した（137頁参照）。

IV. 出土遺物

整理箱で3箱分の遺物が出土した。溝、土坑から出土した古墳時代後期（5世紀末～6世紀前半）と奈良時代の土師器・須恵器片や少量の瓦片や製塩土器の他、SK02から楔形石器（サヌカイト製）、遺物包含層から内面に線刻がある須恵器杯蓋や土馬なども出土した。

V. 調査所見

遺構の遺存状態が悪く、奈良時代の遺構の全体像を把



HJ 第537次調査 発掘区調査位置図 (1/5000)

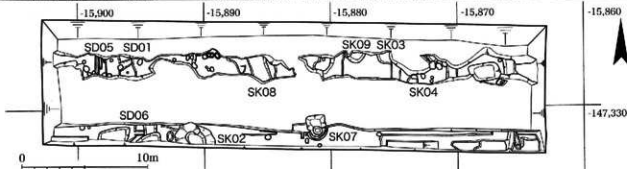


発掘区全景（南西から）

握できなかったが、古墳時代後期の遺構や遺物が多くみられる。周辺には第333次調査と同様に、古墳時代後期の遺構が広がっていることが確認できた。（宮崎正裕）

HJ 第537次調査 検出遺構表

遺構番号	掘 形			主な出土遺物
	平面形	平面規模 (m)	深さ	
SD01	東西溝	長さ1.1以上×幅0.6	0.2m	古墳時代後期の土師器・須恵器
SK02	円形	南北1.5以上×東西2.2	1.1m	楔形石器（サヌカイト製）、古墳時代後期の土師器杯・壺・高杯・須恵器杯身・長脚高杯
SK03	不明	南北1.0以上×東西1.3以上	0.2m	古墳時代後期の土師器壺把手?・須恵器杯身
SK04	不明	南北0.5以上×東西0.9	0.2m	古墳時代後期の土師器・須恵器
SD05	南北溝	長さ1.5以上×幅0.3	0.1m	古墳時代後期の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、丸瓦
SD06	南北溝	長さ0.8以上×幅1.1	0.3m	古墳時代後期の土師器高杯・須恵器高杯、奈良時代の土師器・須恵器杯、平瓦
SK07	円形	南北1.0以上×東西1.8	1.4m	古墳時代後期の土師器・須恵器杯身、奈良時代中頃の土師器杯・皿・高杯・須恵器杯（底部外面に線刻）・壺、黒色土器A型?杯、丸瓦
SK08	不明	南北2.0以上×東西2.0	0.2m	古墳時代後期の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器杯蓋、丸瓦
SK09	不明	南北1.0以上×東西1.3	0.2m	古墳時代後期の土師器・須恵器杯身、奈良時代の土師器・須恵器壺、製塩土器



HJ 第537次調査 発掘区遺構平面図 (1/300)

12. 平城京跡（左京九条三坊十一・十二坪）の調査 第538次

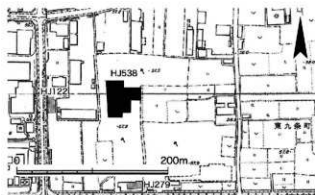
事業名	寺院建設	調査期間	平成17年10月17日～12月21日
届出者名	宗教法人 真澄寺	調査面積	1460㎡
調査地	奈良市東九条町15・18-1	調査担当者	久保邦江・中島和彦

I. はじめに

平城京第538次調査地は、条坊復原によると坪内中央に東堀河が南北方向に貫通する左京九条三坊十一坪・十二坪及びその間の九条条間南小路、東三坊坊間東小路にかかる部分に推定される。調査地周辺の調査例には約70m西で市HJ第122次調査、約100m南の位置で市HJ第279次調査が実施されている。市HJ第122次調査では、九条条間南小路南側溝、市HJ第279次調査では東三坊坊間東小路西側溝の可能性のある南北方向の溝を検出している。これらの調査成果をふまえて、今回の調査は、九条条間南小路および、東三坊坊間東小路の確認と、十二坪の坪内の様相を確認する目的で発掘調査を実施した。

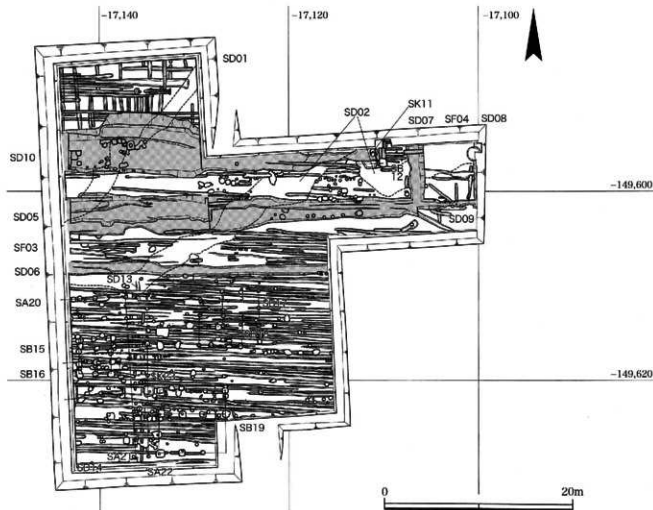
II. 基本層序

発掘区内の基本層序は、造成土 (1.4m)、耕土 (0.25



HJ第538次調査 発掘区位置図 (1/5000)

m)、淡灰色砂質粘土 (旧床土・0.15m)、茶褐色砂質粘土混じり灰色砂質粘土 (0.25m)、暗茶灰褐色砂質粘土 (0.1m) と続き、現地地表下2.3mで黄褐色粘土の地山にいたる。暗茶褐色砂質粘土には8世紀後半から9世紀



HJ第538次調査 発掘区遺構平面図 (1/400)

初頭の遺物が包まれる。遺構検出面の標高は発掘区北端で55.7m、南端で55.8m、東端で56.2m、西端で55.7mである。南北方向ではほとんど比高差がなく、東西方向では東から西に向かってなだらかに下がっている。

III. 検出遺構

主要な検出遺構には、奈良時代以前の流路2条、奈良時代の九条条間南小路の南北両側溝、東三坊坊間東小路の東西両側溝、掘立柱建物5棟、掘立柱列6条、土坑1基がある。各遺構の概要は次頁の検出遺構一覧表の通り。

条坊間連遺構 S D06は市H J第122次調査で検出した九条条間南小路南側溝の延長上に位置した東西溝で、条間南小路南側溝であると考えられる。S D06の北側で検出した東西溝S D05と溝心間距離が7.05mを測り、S D05は九条条間南小路北側溝、その間が九条条間南小路S F03と考えられる。S D07は市H J第297次調査で検出した東三坊坊間東小路西側溝の可能性のある溝の延長上に位置し、同溝と考えられる。S D07の東側で検出した南北溝S D08と溝心間距離が6.8mあり、S D08は東三坊坊間東小路東側溝、その間が東三坊坊間小路S F04と考えられる。S F03とS F04の交差部分で、S F04の両側溝S D07・08は東西小路北側

溝S D05に繋がり、南北に貫通しない。S D07とS D05の交点付近から南東に斜行溝S D09が繋がる。

十一坪の遺構 坪の南東隅部分を検出した。8世紀後半～末の溝1条、掘立柱列を確認した。S D10は九条条間南小路北側溝S D05に平行し約3.2mの間隔を開けた北側で検出した溝である。東三坊坊間東小路西側溝S D07の手前で北にL字形に曲がる。S D10の東端屈曲部には須恵器甕を底部と頸部を欠き正位置で据えていたS K11がある。その南側の坪の南東隅では、柱穴が柱間約3.6mの間隔を開けて東西方向に並ぶ柱列S B12を確認した。遺構の重複関係から、S B12がS D10より古いことがわかる。

十二坪の遺構 坪の北東隅部分を検出した。8世紀後半～末の溝2条、掘立柱建物5棟・掘立柱列3条・土坑1基を確認した。南北溝S D13は東三坊坊間東小路S F04の道路心の延長線上から約33m(約110尺)西に位置する。また、東西溝S D14は九条条間南小路南側溝S D06溝心から21m(約70尺)に位置する。

掘立柱建物は5棟確認しているが、北庇付きのS B19以外は柱間が2×1間から2×3間の小規模な建物である。

IV. 出土遺物



(左上) 発掘区全景 (南西から)・(左下) 十二坪北東部 (西から)



(右上) 十一坪南東部 (西から)・(右下) 九条条間南小路 (西から)

8世紀後半～9世紀初頭の土師器・須恵器・平瓦・丸瓦の破片が遺物整理箱で68箱分出土している。中でもS D05からの遺物の出土量は際だつて多く、土馬・ミニチュア土器などが多く出土しているのが特徴的である。他には土師器・須恵器で、漆が付着しているものが多く出土した。その他の遺物として円筒埴輪片、製塩土器片・墨書土器・線刻土器・転用硯・灰胎陶器の破片、埴埴(トリベ)片、風字硯、軒平瓦(型式不明)がある。特筆すべきものには、S D05の上層から出土した新羅土器がある。壺の体部から底部にかけての破片で、土器の表面にはスタンプ原体で文様が施文されている。上部



S D 05 出土 新羅土器実測図 (1/4)

H J 第 538 次調査 検出遺構一覽表

た、S D05以外でも土馬、ミニチュア土器の甌、甕などの出土が多く。特に土馬の出土総点数は100点を数える。平瓦・丸瓦の破片は僅かである。

V. 調査所見

今回の調査は、九条大路を除くと平城京内での条坊遺構の確認としては最南端となる。出土遺物には、奈良時代初頭のもののみならず、奈良時代後半から平安時代初頭にかけてのものが大半を占め、京内において九条付近の利用がかなり遅れることをうかがわせる。また、九条条間南小路が東二坊坊間東小路を横切ることから、主要な排水は九条条間南小路北側溝に流れ、東から西向きに下る地形から判断すると、西側に推定される東堀河に集められていると考えられる。S D05は東堀河との取付き部近くで溝幅が増し、増水時には路面まで水が溢れていたことがうかがえる。十一坪で確認したS B12は検出位置から門である可能性が考えられる。(久保邦江)

遺構番号	加形	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	備考
S D01	計測線斜行	幅1.0～2.4南北20以上	不明			奈良時代条坊側溝よりも古い。
S D02	計測線斜行	幅1.35～3.2長さ46以上	0.45			奈良時代条坊側溝よりも古い。築地区北端部で蛇行。
S F03	東西道路	幅7.05(側溝中心)長さ43以上				九条条間南小路道路心礎標(X=-149,604.98Y=-17,130.00)
S F04	南北道路	幅6.6(側溝中心)長さ9.6以上				東二坊坊間東小路道路心礎標(X=-149,598.00Y=-17,103.00 庭園心)
S D05	東西溝	幅1.0～4.0長さ43以上	0.3～0.6		8世紀後半～末の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、土馬、製塩土器、ミニチュア甕、新羅土器、風字硯、羽口、埴埴(トリベ)、墨書土器	九条条間南小路北側溝側溝心礎標(X=-149,601.45Y=-17,130.00: 最南端)
S D06	東西溝	幅2.0長さ27.6以上	0.3		8世紀後半～末の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、土馬、製塩土器、ミニチュア甕	九条条間南小路西側溝側溝心礎標(X=-149,608.50Y=-17,130.00: 最南端)
S D07	南北溝	幅1.8長さ6以上	0.3		8世紀後半～末の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦	東二坊坊間東小路西側溝側溝心礎標(X=-149,598.00Y=-17,106.60)
S D08	南北溝	幅0.3長さ6	不明		8世紀後半～末の土師器・須恵器	東二坊坊間東小路東側溝
S D09	斜行溝	幅0.4長さ4.8以上	0.05		8世紀後半の土師器・須恵器	SD05と同時期の溝
S D10	東西溝	幅1.0～6.4長さ34.4以上	0.1～0.6		8世紀後半～末の土師器・須恵器、軒平瓦・軒丸瓦、土馬	築地等の区画施設の附帯溝か?(十一坪)
S K11	煙突	直径0.8	0.15		8世紀後半土加器・須恵器、製塩土器、漆付土器	底部を欠いた須恵器を正位置に設置(十一坪)
S D13	南北溝	幅0.4長さ17.2	0.1		8世紀後半～末の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、製塩土器・土馬	坪を東西1/4に分割する溝の可能性(十二坪)
S D14	東西溝	幅0.4m長さ14.8m～	0.2		8世紀後半～末の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、製塩土器・土馬	坪を南北1/6に分割する溝の可能性(十二坪)
S K23	隅丸方形	東西1.2南北1.2	0.6		8世紀後半～末の土師器・須恵器・土馬	宅地の区画溝 SD13よりも古い(十二坪)

遺構番号	棟方向	規模 桁行(間)×奥行(間)	桁行全長		奥行全長		柱間寸法m		備考
			m	m	m	m	桁行	奥行	
S B12	東西	1	3.6		3.6		3.6		門。S D10よりも古い。奈良時代末の土師器・須恵器出土。(十一坪)
S B15	南北	3×2	3.6	3.2	1.2	1.6	1.6		S B16と空間的に重複するが、前後関係は不明(十一坪)
S B16	東西	3以上×2	4.7以上	3.9	2.4	1.95	1.95		S B15と空間的に重複するが、前後関係は不明(十二坪)
S B17	東西	2×2	3.6	3.3	1.8	1.65	1.65		S B17と空間的に重複するが、前後関係は不明(十二坪)
S B18	東西	2×1	4.6	3.0	2.3	3.0	3.0		S B18と空間的に重複するが、前後関係は不明(十二坪)
S B19	東西	2×3	6.9	4.0	1.3-1.3-1.3	1.3	1.3		北底付き建物。(十二坪)
S A20	東西	4以上	6以上		2.3-2.3-2.3		2.3-2.3-2.3		宅地を囲う北端の区画施設(十二坪)
S A21	南北	7以上	17.2		北から2.5～?～1.3-2.0-2.0				坪を東西方向に1/4分割する宅地内道路際の区画施設(十二坪)
S A22	南北	9以上	4.8		北から2.2-1.5-1.2-2.3～?～1.7-2.7				坪を東西方向に1/4分割する宅地内道路際の区画施設(十二坪)

13. 平城京跡（右京六条四坊十三・十四坪）の調査 第539次

事業名 分譲地造成
 届出者名 太陽興産株式会社
 調査地 奈良市六条西三丁目1559-1の一部、1559-2

調査期間 平成17年10月17日～同年10月18日
 調査面積 10㎡
 調査担当者 武田和哉・三好美穂

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京六条四坊十三・十四坪に該当し、両坪を画する六条条間南小路が想定されている。ただし、調査地周辺の現状の地形は南南方に向かって開けた谷地形で北東から南西に下がる傾斜面である。こうした箇所にまで果たして実際に条坊道路を施工していたのかを疑問視する見方もあり、今回の調査は条坊遺構の有無の確認を主目的として、東西約2.5m、南北約4m、面積10㎡の規模で発掘区を設定した。

II 基本層序

上から、表土(0.25～0.45m)、橙茶灰色土(0.2～0.3m)、橙茶灰色土(0.3～0.5m・やや淡い)、暗橙茶灰色土(0.1～0.6m)、明橙茶色土(0.25～0.4m・やや赤みがかかる)、黄茶灰色土(0.1～0.2m)と続き、地表下1.3～1.6mで黄茶灰色土の地山に至る。表土直下の橙茶灰色土より、無遺物層直上の黄茶灰色土までの各層に奈良～江戸時代の土器・陶磁器片が含まれる。地山上面の標高は、発掘区の南東隅で74.1m、北東隅で74.7mである。

III 検出遺構

地山上面で遺構検出作業を実施したが、特に遺構は検出できなかった。

IV 出土遺物

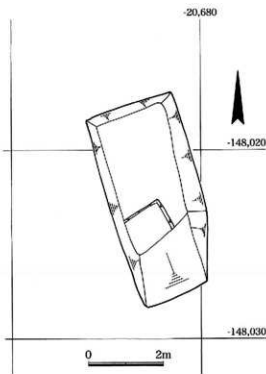
遺物整理箱約1箱分の遺物が出土した。その大半を奈良時代の須恵器、土師器の破片が占めている。

V 調査所見

今回の調査では発掘区的面積上の制約等もあり、条坊遺構の有無について、手がかりを得ることができなかった。ただし、遺物の出土状況から推測する限りでは、調査地周辺には奈良時代の遺構が存在している可能性がある。(武田和哉)



H J 第 539 次調査 発掘区位置図 (1/5000)



H J 第 539 次調査 発掘区遺構平面図 (1/100)



発掘区全景 (東から)



発掘区全景 (南から)

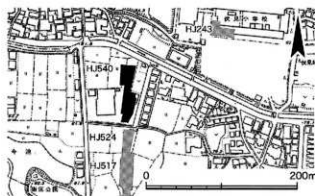
14. 平城京跡（右京二条四坊十二坪）の調査 第540次

事業名	大和中央道街路整備臨時交付金事業（曹原工区）	調査期間	平成17年10月17日～平成18年3月16日
届出者名	奈良市長	調査面積	950㎡
調査地	奈良市曹原町633-4他	調査担当者	久保清子 安井宣也 大森淳司

I はじめに

調査地は、条坊復原では右京二条四坊十二坪の南西部分に相当する。これまでに十二坪内での調査例はないが、南の二条大路及び右京三条四坊九坪では、市HJ第517・524次調査があり、縄文時代の遺物包含層、古墳時代以降の溝、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱列、土坑、溝、鎌倉時代の水田跡、室町時代以降の土坑などが確認されており、奈良時代以前の旧地形は起伏に富んでいたことが判明している。二条大路については、遺存地帯から市HJ第524次調査地内に位置することが推定されたが、鎌倉時代の水田開発時に遺構面が削平されており、検出されていない。さらに九坪南側の十坪での調査例には、市試掘第89-5次調査、市HJ第386次調査¹⁾、県1999年度調査²⁾があり、奈良～平安時代の掘立柱建物及び塀、井戸、溝、土坑、中世の掘り溝などが確認されており、市HJ第386次調査では奈良時代遺構面の下層で、縄文時代の土坑も検出している。なお、永仁六年（1298年）『西大寺三宝料田寄進目録』に、右京三条四坊九坪について「字法陀寺」、右京二条四坊十三坪について「南大路也、法世寺」という注記があり、現在も調査地一帯の字名が「法専寺」であることから、この付近に寺院の存在も推定される。

調査は、十二坪の様相ならびに奈良時代以前の遺構の有無を確認することを目的として、南北2回に分けて調



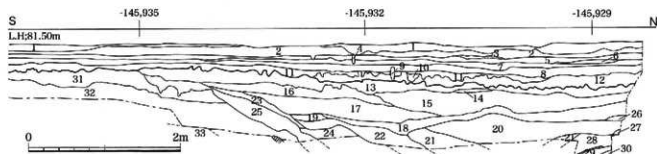
HJ第540次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

査を行った。

II 基本層序

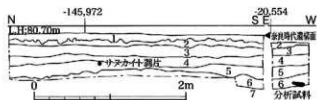
調査地は、北東から南西にかけては0.6～1.0mの厚さで造成土が堆積している。発掘区内の基本層序は、北発掘区北端では、造成土の下に耕土、床土、鎌倉時代水田耕土である明黄白色シルト、明黄灰色シルトと続き、地表下0.6～1.0mで淡黄灰色シルト、淡黄白色砂質シルトとなり、その上面が奈良時代遺構面となる。これより下の堆積状況については、侵食と堆積が繰り返される旧河川埋土で、北に下がる旧地形となることがわかり、奈良時代遺構面の約0.8m下に堆積する黒灰色粘土には、クヌギ節の種実と松毬が含まれていた。

北発掘区南半及び南発掘区では、造成土の下に耕土、鎌倉時代水田耕土である黄灰色粘土と続き、黄褐色粘土



- | | | | |
|----------------------|-----------------------|--------------------------|-------------|
| 1: 造成土 | 10: 黄灰色砂質シルト | 19: 黄灰色シルト | 27: 淡灰色粘土 |
| 2: 現代水田耕土 | 11: 明黄灰白色シルト (中世水田耕土) | 20: 淡褐色細砂 | 28: 暗灰色粘土 |
| 3: 灰色砂質シルト (旧水田耕土) | 12: 明黄灰色シルト (中世水田耕土) | 21: 灰色細砂 | 29: 青灰色シルト |
| 4: 灰色砂 (枕跡) | 13: 淡黄白色砂質シルト | 22: 黄灰色砂 | 30: 黒灰色粘土 |
| 5: 灰白色砂質シルト (旧水田耕土) | 14: 淡黄灰色細砂 | 23: 黄灰色粘土 | 31: 淡黄灰色シルト |
| 6: 暗褐色砂質シルト | 15: 黄灰色中粒砂 | 24: 青灰色シルト | 32: 暗灰色粘土 |
| 7: 暗灰色砂質シルト (旧水田耕土) | 16: 淡黄白色砂質シルト | 25: 灰褐色細砂と黄灰色粘土ブロック (炭倉) | 33: 灰色粗砂 |
| 8: 淡黄褐色砂質シルト (旧水田耕土) | 17: 黄灰色細砂と黄白色シルトの混合土 | 26: 淡黄灰色シルト | |
| 9: 灰色砂質シルト (枕跡) | 18: 淡灰色シルト | | |

HJ第540次調査 北発掘区西壁土層図 (1/50)



- 1: 黄色粘土
2: 暗灰色シルト
3: 黄褐色シルト
4: 灰色シルト(炭含む)
5: 灰白色シルトと灰色シルトの混合土(石器含む)
6: 黄灰色細砂(¹⁴C年代測定試料採取層)
7: 淡黄白色粘土

¹⁴C年代測定試料採取地土層断面図 (1/50)

となる。奈良時代遺構面は地表下0.3~1.0mの黄褐色粘土上面で、西から東へ向かって緩やかに下がり、その標高は北発掘区北端で80.7m、南北発掘区西端で80.7~80.9m、東端で80.5mである。遺構検出作業は、淡黄灰色シルト、淡黄白色砂質シルト及び黄褐色粘土上面で行った。

また、奈良時代遺構面において、サヌカイト製石器を検出したことから、南北方向と東西方向に合計8箇所の試掘坑を設けて、土層観察を実施した。その結果、遺構は検出されなかったが、西から東に下がる旧地形上に、サヌカイト製石器、縄文土器、炭化物を包含する層が複数層堆積することが判明した。これらの遺物包含層の堆積した時期の下限を明らかにするために、北発掘区南端において包含層直下の黄灰色細砂に含まれる炭化物をサンプル採取し、放射線炭素年代測定を実施したところ、補正¹⁴C年代2,410±40 (Y. B. P) (B. C 420) という結果を得た。(136頁参照)

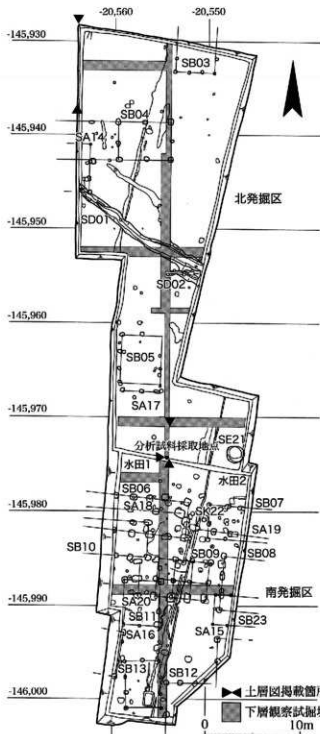
以上の点から、遺構面より下に堆積する遺物包含層は、弥生時代前期頃から奈良時代までの間に調査地西側から流入した土砂によって堆積したことがうかがえる。

III 検出遺構

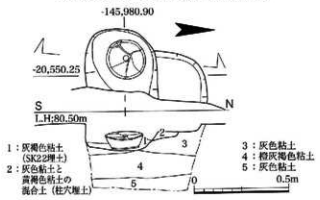
検出遺構には、古墳時代以降の溝2条 (S D01・02)、奈良時代の掘立柱建物11棟 (S B03~13)、掘立柱列7条 (S A14~20)、井戸1基 (S E21)、土器埋納土坑1基 (S K22)、鎌倉時代の掘立柱建物 (S B23)、水田2面 (水田1・2) がある。掘立柱建物及び柱列の概要は52ページの表にまとめたとおりである。

古墳時代以降の遺構 S D01は、幅0.8~1.8m、深さ0.5~0.6m、北西から南東方向に降る断面形がU字形の素掘りの溝で、埋土中からは縄文時代中期の船元式土器片、時期不明の土器器細片、サヌカイト剥片が数点出土した。S D02は幅0.3~1.5m、深さ0.1~0.5m、西から東方向に降る断面形がU字形の素掘りの溝で、重複関係から S D01の方が古いことがわかる。

奈良時代の遺構 掘立柱建物及び柱列は十二坪の南北1/2ラインより南側に集中して建てられている。重複関



H J 第 540 調査 発掘区遺構平面図 (1/400)



土器埋納土坑 S K 22 平面・断面土層図 (1/20)

係から2時期以上の変遷があり、建物の振れは大きく3つに分かれ、大半が北で東に振れている。これらのうちS B06~09、S A15・20はほぼ同じ振れであることから、同時期の建物と推測できる。南発掘区の遺構面は、南隣の九坪とは異なり、削平を受けておらず、検出面から0.8mの深さにまで達する柱穴がある。

S E21は径1.8m、深さ1.4mの平面が不整形の井戸で、枠材は抜き取られて残存しない。枠抜き取り部分からは奈良時代後半~平安時代初頭の土師器・須恵器・製塩土器・土製品、奈良時代の軒丸瓦、丸瓦、平瓦、砥石、木製編物、瓢箪、桃核等の種実が出土した。

S K22はS B08西側で検出した土器埋納土坑で、径0.4m、深さ0.15mの平面円形の掘形底に須恵器杯蓋で蓋をした須恵器杯Bを納めていた。杯内は上が充満していたのみで、銭貨等は見られなかった。須恵器杯・蓋ともに8世紀後半から9世紀初頭のもので、地鉄もしくは胞衣壺の可能性が考えられる。

鎌倉時代の遺構 水田1は東西10m以上、南北36m以上、検出面からの深さ0.3m前後、水田2は東西6.5m以上、南北36m以上、検出面からの深さ0.3mで、水田1・2間には高低差があり、東の水田2の方が低く、調査前の水田もほぼ同位置でこれを踏襲していた。北発掘区部分は近世以降の耕作により鎌倉時代の水田畦畔は削平されている。水田耕土である灰黄色粘土からは、奈良時代~平安時代初頭の土師器・須恵器・黒色土器・土馬、瓦埴類、鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・石鍋、時期不明のサマカイト剥片・砥石・埴塙・鉄滓が出土した。また、水田面では耕作時の牛の足跡を確認できた。重複関係から建物S B23は水田2よりも古いことがわかる。

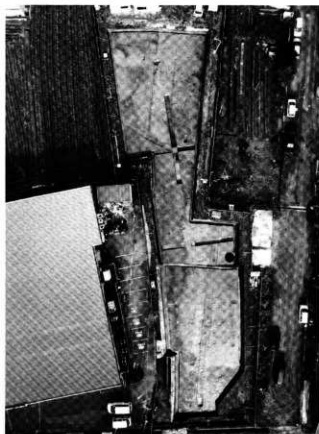
IV 出土遺物

遺物整理箱17箱分の遺物が出土した。遺物には、縄文時代の土器、縄文~弥生時代の石器、奈良時代の土師器・須恵器・製塩土器・土製品、瓦埴類、木製編物、瓢箪、桃核、砥石、平安時代初頭の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器、鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・石鍋、時期不明の砥石・埴塙・鉄滓がある。

以下、主要遺物について述べる。

黒書土器 S B13柱抜き取り跡から、底部外面に「恵信」(人名カ)と黒書された須恵器杯B、S A19柱穴柱跡から「♀」(記号カ)と黒書された須恵器杯A、S E21柱抜き取り部分から、底部外面に「□」[山カ]と黒書された須恵器杯A、底部外面に「□」[富カ]と黒書された須恵器杯Bがそれぞれ1点ずつ出土した。

鳥形土器 水田2から両側面に線刻のある須恵器平瓶



発掘区全景 (上が北)



北発掘区全景 (南から)



南発掘区全景 (北から)

H J 第 540 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (間)		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		備考
		桁行×梁行	(m)			桁行	梁行	
S B03	東西	3×2以上	4.05	3.0	1.35等間	1.5等間	柱穴の深さ0.2m前後	
S B04	東西	3以上×2	8.1以上	4.2	2.7等間	2.1等間	S B06よりも古い、開仕切りあり? 柱穴の深さ0.4m前後	
S B05	南北	3×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間	柱穴の深さ0.1m前後	
S B06	東西	4以上×2	7.35以上	3.6	東から1.95-1.8-1.8-1.8	1.8等間	柱穴の深さ0.4~0.8m、8世紀末~9世紀初頭の土層出土	
S B07	東西	2以上×2	3.6以上	3.6	1.8等間	1.8等間	柱穴の深さ0.2~0.6m前後	
S B08	南北	3×1以上	5.7	1.8	北から1.95-1.95-1.8	1.8	柱穴の深さ0.5m前後	
S B09	東西	3×2	5.4	3.9	1.8等間	北から2.1-1.8	礎柱建物、柱穴の深さ0.2~0.6m	
S B10	東西	2×1? 3.6以上	3.6	1.8等間	3.6	1.8等間	柱穴の深さ0.4m前後	
S B11	南北	3×2	4.5	3.6	1.5等間?	1.8等間?	柱穴の深さ0.5m前後	
S B12	不明	2以上×2以上	3.0以上	3.6	1.5等間		柱穴の深さ0.3m前後	
S B13	南北	3×2	4.95	3.6	1.65等間	1.8等間	柱穴の深さ0.3~0.5m、墨守(人名?) 須磨出土	
SA14	南北	3	4.95		1.65等間		S D01・S B04より新しい、柱穴の深さ0.1m前後、建物の一部の可能性あり	
SA15	南北	1以上	2.4以上				柱穴の深さ0.3m前後、建物の一部の可能性あり	
SA16	南北	1以上	2.7				柱穴の深さ0.3~0.5m、建物の一部の可能性あり	
SA17	東西	2	4.2		2.1等間		S B06に伴う目隠し塀か、柱穴の深さ0.1m前後	
SA18	東西	2以上	5.4		2.7等間		柱穴の深さ0.2m前後	
SA19	東西	2以上	3.9		1.55等間		柱穴の深さ0.4m前後、墨守(記号?) 須磨出土	
SA20	南北	2	3.6		1.8等間		S B15に伴う目隠し塀か、柱穴の深さ0.2~0.5m	
S B23	不明	2×1以上	1.5以上	3.0			中世の建物、柱穴の深さ0.2m	

の把手部分が1点出土した。外面全体に自然釉がかかっている。線刻は水鳥の羽毛を表していると考えられ、長岡京跡や愛知県刈谷市・西加茂郡三好町所在猿投塚、長野県諏訪市金鈴場遺跡1号古墳³⁾で類似の出土例がある。

瓦 丸瓦・平瓦・埴とS E 21出土の軒丸瓦6279Ab 1点、水田1・2畦畔上面出土の軒丸瓦型式不明2点、包含層出土の軒平瓦型式不明1点がある。

V 調査所見

① 西から東に下がる旧地形上に縄文土器、サヌカイト製石器を包含する層が堆積することが判明した。これらの堆積層は、炭化物の分析結果から得られた年代と検出遺構との重複関係から、弥生時代前期頃から奈良時代までの間に堆積したとみられ、調査地付近には縄文時代の遺跡が存在する可能性が高いと考えられる。

② 十二坪は、南隣の三条坊九坪とは異なり、奈良時代の遺構の残存状況も良好で、宅地利用については、推定される二条大路に面する南半部分の方が建物の数が多く、規模も大きいことがわかる。建物柱穴から、僧名とも考えられる「惠信」と記された墨書土器が出土し、鳥形土器など特異な遺物が出土したが、寺院跡の手掛かりをつかむには至らなかった。

③ 調査地以前の水田地帯は、十二坪も九坪と同じく鎌倉時代に水田化されたものを踏襲する。(久保清子)

- 奈良市教育委員会「その他の調査」『奈良市埋蔵文化財調査要報報告書平成元年度、1990、同「平城京右京三条坊十坪 宝来遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査要報報告書平成9年度(第一分冊)』1998
- 奈良県立橿原考古学研究所「平城京右京三条坊十坪の調査」『奈良県遺跡調査要報(第1分冊)』2000
- 古代の上器研究会「古代の土器研究—律令的土器様式 西・東3 熊輪陶器」1994、長野県教育委員会他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4— 昭和50年度」1976



H J 第 540 調査地付近条坊概念図 (1/2000)
(奈良文化財研究所作成 平城京城地形図 (1/1000)
に発掘区を重ねて作成)

15. 平城京跡（左京三条四坊四坪）の調査 第542次

事業名	共同住宅建設	調査期間	平成18年1月18日～2月3日
届出者名	宝来住宅株式会社	調査面積	146㎡
調査地	奈良市大宮三丁目204番地7	調査担当者	武田和哉

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条四坊四坪の北辺東側付近に該当している。調査地の周辺では過去に調査事例が数例あり、それぞれの調査で奈良時代の掘立柱建物・柱列などの遺構が検出されている¹⁾。ただし、調査地北隣の敷地で実施した国第138次調査²⁾においては、他の調査同様に掘立柱建物・柱列を検出したものの、発掘区の北側および西側の部分は、鎌倉時代以降の旧道路によって浸食され、奈良～平安時代の遺構は失われていることが確認されている。

これらの成果を踏まえて、本調査では、敷地北辺に想定される三条条間南小路南側溝の検出などを目的に2ヶ所の発掘区を設定した。

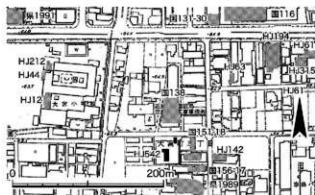
II 基本層序

発掘区内の基本層序は、最上層にアスファルトおよび造成土(1.0～1.2m)があり、以下順に、黒褐色粘質土(約0.2m 旧耕土)、暗灰色土(約0.2m 旧床土)、暗黄灰色粘質土(0.05～0.2m)、暗灰色粘質土(0.2～0.25m)と続き、現地表下約1.1～1.5mで黄褐色粘質土(約0.2m 整地層)に達する。この整地層の下が地山であり、北発掘区では黄灰色粘土、また南発掘区では暗灰褐色粘土となっている。遺構検出作業は、整地層の上面と地山上面で実施した。整地層の上面の標高は、北発掘区・南発掘区ともに63.7～63.8m、地山上面の標高は、北発掘区で63.4～63.5m、南発掘区で63.5～63.6mである。なお、北発掘区の北端には東西方向の旧地割がみられ、その部分を境にして水田面が異なる。遺構面は、北発掘区の北端に比べて南側では約0.2m低くなる。

III 検出遺構

検出した主要な遺構には、三条条間南小路南側溝とみられる東西溝(SD01)と南北溝2条(SD02-03)がある。遺構の詳細は、次頁の検出遺構一覧表の通りである。SD01は、北発掘区の北端で検出した溝で、位置的に三条条間南小路南側溝と考えられる。埋土の土層観察から、概ね3時期の堆積が認められる。溝心の位置はX=-146.418.4 Y=-16.905.0である。

SD02は、南発掘区中央で検出した。整地層上面より掘り込まれており、埋土は概ね2層に分かれる。奈良～平安時代前半頃の土師器・須恵器・瓦・埴埴・製



HJ 第542次調査 発掘区位置図(1/5000)

塩土器が出土した。溝心の位置はX=-146.433.0 Y=-16.919.0である。

SD03は、南発掘区西壁でかろうじて確認した。土層断面からみて、西に下る肩の部分が確認できる。前述のSD02と同じ層位から掘り込まれており、埋土の状況はSD02埋土に酷似している。

IV 出土遺物

遺物整理箱14箱分の遺物が出土した。その内訳は、奈良～平安時代の土師器・須恵器・墨書土器・練刺土器・製塩土器、軒丸瓦(6308Aa・型式不明各1点)・軒平瓦(型式不明1点)・丸瓦・平瓦、甕、時期不明のサヌカイト割片、石斧、鉄滓、埴埴などである。このうち、鉄滓は南発掘区内のピットより出土。大半は奈良～平安時代前半の土師器と須恵器、丸・平瓦の破片が占めている。

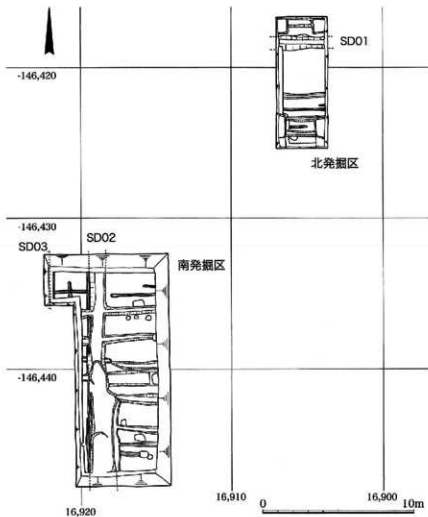
V 調査所見

今回の調査で検出したSD01は、周辺における過去の調査で確認された三条条間南小路南側溝の検出位置と比較すると概ねその延長上にあるので、同溝と見なしうる。

またSD02と03については、約2mの間隔をおいて南北方向に並行しており、SD02は坪の東西幅のほぼ中央付近に位置することが計算上わかる。こうしたことから、SD02と03は坪内を区画する道路の側溝である可能性もあるが、SD03の検出が十分でないため、今後の隣接地での調査結果を待って判断したい。

(武田和哉)

- 1) 奈良国立歴史考古学研究所「平城京左京三条四坊四坪調査報告」「奈良県立総合文化センター」1999年および、奈良国立文化財研究所「左京三条四坊四坪の調査 第156-17次」「昭和59年度平城京発掘調査報告書」1985
- 2) 奈良国立文化財研究所「左京三条四坊三坪の調査 第138次」「昭和66年度平城京発掘調査報告書」1982

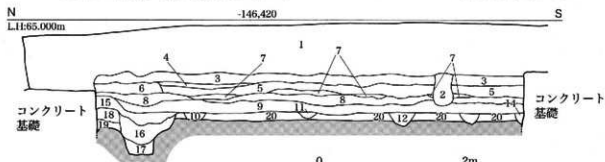


北発掘区全景（北から）



南発掘区全景（北から）

H J 第 542 次調査 発掘区遺構平面図 (1/250)



- | | | | |
|-------------------------|--------------------|-----------------------------|--------------------------------------|
| 1: 造成土 | 7: 暗灰色土 (旧床土・やや濃い) | 14: 暗灰色土 | 18: 暗黄灰色粘土 (茶色がかる
・SD01第I期埋土) |
| 2: 掘込土 | 8: 暗黄灰色粘質土 | 15: 暗黄灰色粘土
(SD01第III期埋土) | 19: 暗灰褐色粘質土
(SD01第I期埋土) |
| 3: 黒褐色粘質土 (旧耕土) | 9: 暗灰色粘質土 (遺物包含層) | 16: 暗灰褐色粘質土
(SD01第II期埋土) | 20: 黄褐色粘質土 (埋地層) |
| 4: 黒褐色粘質土
(旧耕土・やや暗い) | 10: 暗灰色土 | 17: 暗灰色粘土
(SD01第II期埋土) | 地山: 黄灰色粘土 (北発掘区)
または暗灰褐色粘土 (南発掘区) |
| 5: 暗灰色土 (旧床土) | 11: 暗灰色土 | | ※10~14 素掘り溝の埋土 |
| 6: 暗灰褐色土 (旧床土) | 12: 暗灰色土 | | |
| | 13: 暗灰色土 | | |

H J 第 542 次調査 北発掘区東壁土層断面図 (1/50)

16. 平城京跡（右京六条四坊十四坪）の調査 第543次

事業名	宅地造成	調査期間	平成18年1月10日～3月10日
届出者名	個人	調査面積	1490㎡
調査地	六条西三丁目1480-4の一部、1480-5	調査担当者	中島和彦・久保邦江

I はじめに

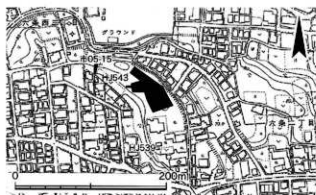
調査地は、平城京の条坊復原では平城京左京六条四坊十四坪の北西部にあたり、また弥生・古墳時代の六条山東遺跡の東半に相当する。周辺一帯は西の京丘陵上で、尾根筋と谷筋が複雑に入り組む。調査に先立ち遺跡の有無を確認する試掘調査（市05-15次調査）を実施し、結果遺構を検出した丘陵上の平坦部で発掘調査を行った。

調査地は北西から南東にのびる丘陵上にあり、幅約19m、長さ約30mの平坦面が南北に弓なりに広がっている。現況では北西部では平坦面が徐々に狭まり、幅が10mにも満たない地峡部となって西側と北東側の丘陵へと続く。そこを除き周囲は谷である。

発掘区はこの平坦面の北半部にあたる。後述する遺構はすべて平坦面上にあり、斜面地にはない。丘陵の南斜面には幅約8mのテラス状の平坦面（以下南テラス面とする）があり、ここでも遺構が確認された。この南テラス面は調査の結果北側と東側が直線的であり、丘陵斜面の一部を人工的に造成したものと考えられる。

II 基本層序

発掘区内の層序は、丘陵の平坦面上及び南テラス面は厚さ約0.1～0.25mの表土直下で明灰白色粘土または茶褐色粘質土の地山となる。丘陵上は、植物による遺構面の土壌化がすすみ、後述する土器棺墓や土器埋納遺構の土器の上面はこの表土層中にある。堆積土は丘陵斜面を下がるに従って厚くなり、最深部では表土の下に茶褐色系の土が数層堆積し、深さは約0.5mとなる。地山の標高は発掘区南端の最高所で85.4m、北西部の最高所で86.5mあり、発掘区中央部が丘陵平坦面上で最も低



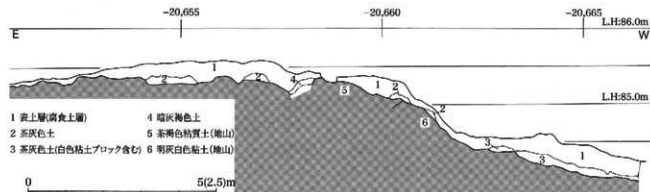
HJ 第543次調査 発掘区位置図 (1/5000)

く84.5mである。また南テラス面の地山上面の標高は83.3～84.1mである。

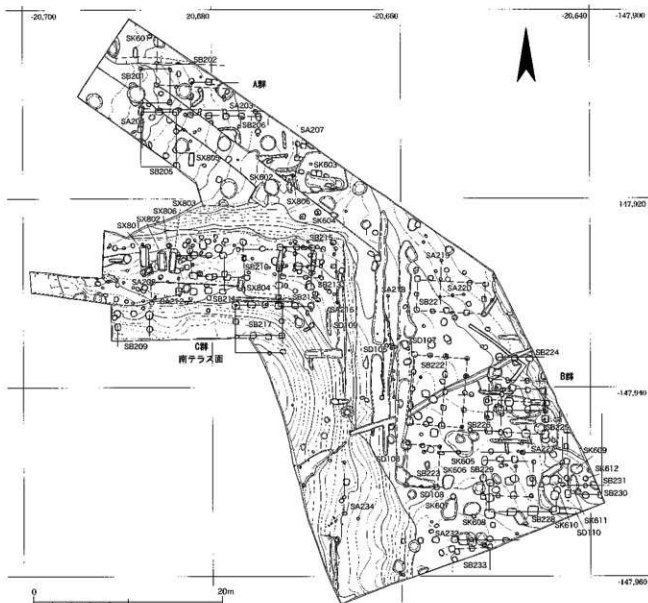
III 検出遺構

奈良・平安時代の掘立柱建物24棟、掘立柱列7条、土坑11基、溝5条、平安時代の墓6基、時期不明の掘立柱列2条がある。また発掘区全域にわたって近現代の樹木の植え込み穴がある。遺構の詳細は一覧表に記し、以下主要なものを記す。

溝 発掘区中央やや東寄り南北溝（西からS D 105・106・107）が3条並んでおり、重複関係からS D 105よりS D 106が新しいことがわかる。S D 107は南端で東に折れ東西溝S D 108となる。溝は十四坪の東西中軸線近くであり、これらの溝をまたいで建つ掘立柱建物がないことから、溝は宅地内の区画溝と考えられ、平行するS D 105とS D 107の間は幅約1.5mの通路とも考えられる。いずれの溝からも漆の付着した土器が数多く出土した。S D 109は南テラス面の東端の南北溝で、丘陵上からの排水を受けたものと考えられる。



HJ 第543次調査 発掘区南壁土層図 (1/100・縦方向は1/50)



HI 第 534 次調査 発掘区遺構平面図 (1/400)

掘立柱建物・柱列 建物・柱列はその分布から大きく A～C の 3 群に分けられる。丘陵上にあり、南北溝 S D105～107 の北西側の群 (A 群) と、東側の群 (B 群)、南テラス面の群 (C 群) である。

A 群には掘立柱建物 4 棟、掘立柱列 3 条がある。北側は、後述の土坑 S K601 のため地面が約 0.7m 低く、柱穴は検出できなかった。重複関係から 3 時期に分けられる。

A 群-1 期には S B202、S A203・204 がある。S B202 は S K601 沿いに建つ梁間 1 間の建物とみられ、S K601 によって北側を削平されたものとも考えられる。S A203・204 はその南側に「L」字に囲う塀であるが、囲い内には建物は確認できず性格は不明である。

A 群-2 期には S B205・206、S A207 がある。建物 2 棟は「L」字に配置され、柱列 S A207 はその東側にある。

A 群-3 期には S B201 の 1 棟のみである。柱穴規模が小さく、最も新しい時期と推定した。

B 群には掘立柱建物 11 棟、掘立柱列 3 条があり、重複関係から 4 時期に分けられる。

B 群-1 期には S B228・233、S A218・227 がある。S A218 と 227 に囲われた北半部には建物が確認できず、S A227 の南側に建物 S B228・233 の 2 棟が建つ。

B 群-2 期には S B221・222・223・224・230、S A232 がある。S B221・222・223 は西側の柱筋をそろえて南北に並び、東側に S B224・230 の 2 棟の建物がある。また S B223 と S B230 は、南側の柱筋をそろえ、その南側には S A232 がある。重複関係から南北溝 S D107 より古い。

B 群-3 期には S B225・229 の 2 棟がある。2 棟は西側の柱筋をそろえ南北に並ぶ。

B 群-4 期には S B226・231 がある。重複関係から 2 期の建物より新しいが、3 期との重複関係は不明。柱穴規模の小さい一群で、最も新しい時期と推定した。

B群は2期のあり方が特徴的である。各群概ね1時期は2棟ほどで構成されているが、B群-2期は5棟で構成され、その配置も他に比べ整然としていることが指摘できる。またB群-1期の建物は、重複関係から後述する焼上坑群より新しいことがわかる。土坑群からは8世紀後半の土器が出土しており、B群-1期の1限がわかる。

C群には、独立柱建物7棟、独立柱列3条があり、重複関係から4時期に分けられる。

C群-1期にはSB210・213、SA208・216がある。南テラス面の北側の奥にSB210と213が東西に2棟並び、その東西に南北拵SA208・216がある。SB210の平面形はやや傾いた矩形であり、SB213の柱間は不

II J 第543次調査 検出遺構 一覧表

建物遺構番号	築方向	規模 (前行×奥行)	前行全長 m	幅間全長 m	前行柱間寸法		幅間柱間寸法		備考
					m	m	m	m	
SB201	南北	1×1	3.6	3.0	3.0	3.0	3.0	2×2の建物の残存のみ残存か?	
SB202	東西	1以上×2	6.75以上	2.25以上	2.25	2.25	2.25	独立柱建物×南面建物との重複関係か?	
SA203	東西	5以上	12以上		1.8-1.8	2.4-2.7-3.3		SA204に連続、SR203より古い	
SA204	南北	1以上	1.8以上		1.8			SA203に連続、SR203より古い	
SB205	南北	3×2	6.0	3.5	2.1-2.1-1.8	1.8等間	1.8等間	SA203・204より新しい	
SR206	東西	4以上×2	7.2以上	3.6		1.8等間	1.8等間	SA203より新しい	
SA207	南北	2以上	1.5以上			1.5			
SA208	南北	3	5.85			1.95等間		SX901より古い	
SB209	南北	2以上×2	1.5以上	3.3		1.5	1.65等間		
SB210	東西	3×2	5.05	3.9		1.95等間	1.95等間	SB211より古い	
SB211	東西	3×2	4.95	3.6		1.65等間	1.8等間	SB210より新しい	
SA212	東西	4	5.1			1.2-1.2-1.2-1.5		SB211より新しい	
SB213	東西	2	4.2	3.0		1.8-2.4	1.5等間	SB214より古い	
SB214	東西	2×3	5.55	3.3		1.65等間	北2.25	本階付・SB213・217より新しい	
SB215	東西	3×2	4.2	2.4		1.4等間	1.2等間	SB214より新しい	
SA216	南北	2	4.8			2.4等間			
SR217	東西	3×3	4.95	4.95		1.65等間		南1.65 両階付・SB214より古い	
SA218	南北	3	10.5			5.4-2.4-2.7			
SR219	南北	2	4.0			2.0等間		近現代の覆いの可能性あり	
SB220	東西	2	2.5			1.25等間		近現代の覆いの可能性あり	
SR221	東西	4×2	7.2	3.3		1.65-1.65-2.1-1.8	1.65等間	本階付の柱穴の柱抜き取り跡に土器等盛土を挿入	
SB222	南北	4×3	7.35	5.7		1.95-1.8-1.8-1.8	1.8等間	兼2 本階付	
SR223	南北	1(27)×2	4.5	3.3		4.5(2.25等間)×7	1.65等間	2×2の建物の遺存のみ残存か?	
SB224	東西	3×3	4.95	5.4		1.65等間	1.65等間	階2付 本階付	
SR225	東西	3×3	6.3	5.7		2.1等間	1.65等間	兼2.4 本階付	
SB226	東西	1以上×2	3.3以上	3.9		3.3	1.95等間		
SA227	東西	4	13.8			3.6-3.3-3.3-3.3			
SR228	東西	3×2	6.75	3.3		2.25等間	1.65等間	SB229より古い	
SR229	南北	2×3	3.9	5.25		1.8等間	北1.95	本階付・SB228より新しい	
SB230	南北	4以上×2	7.2以上	3.6以上		1.8等間	1.8等間	SB231より古い	
SR231	?	3以上×2以上	2.4以上	2.4以上		2.4	2.4	SB230より新しい	
SA232	南北	6以上	10.8			1.8等間			
SB233	?	2以上×1	4.2	?		2.1等間	?		
SB234	南北	3	5.4			1.8等間			

上坑・溝 遺構番号	平面形	掘削		時期	主要出土遺物		備考
		平面積 (m ²)	深さ (m)		土器器形・瓦・甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	土師器器形・瓦、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器21点 (2022g)、十瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘15g	
SK601	不明	東西0.5以上、南北3.0以上	0.5~0.9	8世紀末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK602	不整形三角形	東西1.8、南北2.6	0.3	8世紀後半~末?	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (2022g)、十瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘15g	漆片の土器出土	
SK603	側丸方形	東西5.3、南北4.2	0.2~0.5	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器21点 (2022g)、十瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘15g	漆片の土器出土	
SK604	円形	径0.68	0.44	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK605	不整形三角形	東西3.0、南北2.7	0.2	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK606	不整形円形	東西1.3、南北1.5	0.2	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK607	不整形	東西1.7、南北2.4	0.2	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK608	側円形	東西1.8、南北1.5	0.2	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK609	側円形	東西1.2、南北1.0	0.2	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK610	円形	東西0.7、南北0.7	0.1	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK611	不整形側円形	東西1.2、南北0.2	0.1	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SK612	側円形	東西1.0、南北0.9	0.2	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器出土	
SX807	円形	径0.15	0.8	8世紀後半~末?	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	土器器形・瓦	
SD195	側丸方形	長さ24.0	0.2	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器多く出土	
SD196	側丸方形	長さ15.0	0.2	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器多く出土	
SD197	側丸方形	長さ26.0	0.2~0.4	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器多く出土	
SD198	側丸方形	長さ4.2	0.2	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器多く出土	
SD199	側丸方形	長さ11.5	0.1	8世紀後半~末	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器多く出土	
SD110	円形	径0.7~1.0	0.1	8世紀後半	土師器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	漆片の土器多く出土	

遺構番号	平面形	基瓦・地盤		形状・構造	柱間寸法		主要出土遺物
		平面積 (m ²)	深さ (m)		幅間 (m)	前行 (m)	
SX801	側丸方形	長さ2.25×幅0.90	0.6	組合式木桁	長さ1.95×幅0.48	須恵器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	
SX802	側丸方形	長さ2.20×幅0.95	0.64	組合式木桁	長さ1.7×幅0.35	須恵器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	
SX803	側丸方形	長さ2.57×幅0.75	0.4	組合式木桁	長さ2.57×幅0.75	須恵器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	
SX804	側丸方形	長さ1.50×幅0.77	0.57	組合式木桁	長さ1.25×幅0.36	須恵器器形・瓦、甕、須恵器器形・蓋・甕、製瓦土器2点 (35g)、十瓦群平瓦1点 (66630)、丸瓦、平瓦、鑄鉄口、鉄釘1591点、漆片1点	
SX805	側丸方形	長さ1.51×幅0.30	0.19	組合式木桁	長さ1.25×幅0.30	鉄釘11本	
SX806	円形	東西0.48×南北0.46	0.45以上	土師器器形・瓦を敷	径0.3×高さ0.36	土師器器形・瓦	



発掘区全景（北西から）



古墓群と竪立柱建物（(南西から)）

等間と、やや粗雑な様相のある建物群である。

C群-2期にはS B209・217がある。2棟とも南テラス面の南側の斜面地に東西に並ぶ。当時は平坦面がここまで及んでいたと考えられる。

C群-3期にはS B211・214がある。建物は東西に2棟並び、1期と似た配置になる。

C群-4期にはS B215、S A212がある。南テラス面の北東の最奥部にS B215が1棟だけである。

C群はおおむね東西に2棟並ぶ建物配置が各期にわたり踏襲されているようである。重複関係から3期の建物が後述される古墓群より古いことがわかる。

以上のように各群は3～4時期に分けられ、各時期はおおむね群間で対応すると考えられる。しかしながら、建物配置は各群間での有機的な関係を見いだせず、各群が独立して変遷していったと想定される。遺構の重複関係から、B群-1期の建物が焼土坑群より新しく8世紀後半以降、C群-3期の建物が古墓群より古く9世紀前半以前で、建物群の時期もこの間に納まるものであろう。

土坑 発掘区全域に分布するが、性格が判明するものはない。焼土で埋まるものや、出土遺物に生産関係に関わるものが多いなどの傾向がある。

S K601は、発掘区北端の土坑で、大半は発掘区外につく。南肩のみ検出し平面形は不明。深さ約0.5mで、底はほぼ平坦だが、発掘区西端部分で楕円形の土坑状に一段深くなる。フイゴ羽目と鉄滓がまぎらって出土しているが、焼土・炭等は見られず、土馬・甕等も共存する。生産関係の遺物を二次的に廃棄したものと思われる。

S K603は、ややいびつな隅丸方形の土坑で、深さ約0.2mで、底は平坦であるが、南半部が東西約4.0m、南北約1.2mの長方形に一段低くなる。土師器、須恵器と共に製埴土器が数多く出土する。

S K609～612は、いずれも焼土と炭で埋まる土坑で、土坑の壁面に焼けた痕跡はない。出土遺物は8世紀後半頃の土師器と須恵器が少量出土する他、S K611から鉄製の刀子が1点出土したのみである。西側には焼土坑群を囲むように溝S D110があり、これらは一群のものと考えられる。土坑・溝を含め周辺からは漆付着土器が数多く出土する。重複関係からB-1期の建物群より古い。

墓 木棺墓5基、土器棺墓1基がある。大きく3箇所に分かれており、丘陵上の南側にある1基の木棺墓(S X805)、南テラス面の西側に東西に並ぶ3基の木棺墓(S X801～803)とそれに隣接する1基の土器棺墓(S X806)、その東約7mの所の1基の木棺墓(S X804)である。木棺の主軸はいずれも南北方向で、北枕と考えられる。すべて木棺本体は残存しないが、木棺痕跡と鉄

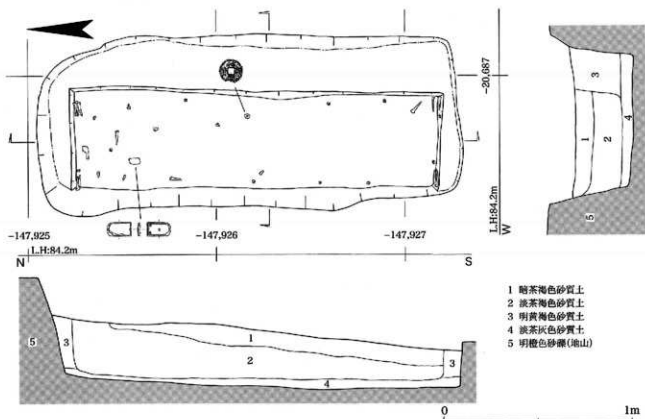
釘の出土位置から4基の木棺が復元できた。なお骨・灰などの遺骨は出土しなかった。詳細は表に記す。

S X801は南テラス面に3基並んだ木棺墓の西端の木棺墓で、木棺に使用した鉄釘が3本出土し、鉄釘に遺存する木質と出土位置から木棺の規模と構造が復元できる。

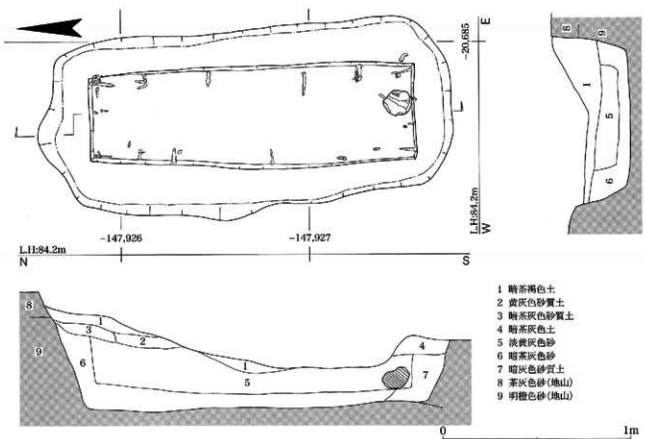
木棺は墓坑底に厚さ3～5cmの土を入れた上に、墓坑の西端に寄せて置かれる。棺底のレベルは北が約5cm高い。木棺主軸はほぼ南北を向く。鉄釘は原位置をとどめているものが2本ある。釘先を上に向けて棺底からほぼ直立して出土したものが13本あり、南北小口側に2本ずつ、西側に5本、東側に4本ある。また木棺の四隅には、木棺主軸と直交して水平に出土する鉄釘が9本あり、いずれも釘先を棺内側に向ける。この鉄釘は棺底から上へ0.2～0.27mの間で、やや間隔をあけて上下にほぼ同じ位置で2本(北東隅のみ3本)ずつが出土した。他の鉄釘は棺内から不規則に出土し、棺材が腐食落下した際に原位置を動いたものと考えられる。これらのことから、木棺は組合式で、側板で小口板をはさみこみそれを底板上に置く構造であることがわかる。鉄釘に遺存する木質から、棺材の厚さは側板と底板で約3cmと推定される。鉄釘は23本の使用部位が判明した。両側板から打ち込むものが北小口板に各上下に3本ずつ、南小口板に各上下に2本ずつ、底板から打ち込むものが、西の側板に5本、東の側板に4本、南北両小口板に2本ずつである。

副葬品には神功間費1点、銅製巡方1点、銅具1点がある。前者は木棺中央のやや東寄りから、後者は北端付近から、いずれも棺底から約0.25m上で出土しており、木棺蓋上に置かれたものと考えられる。

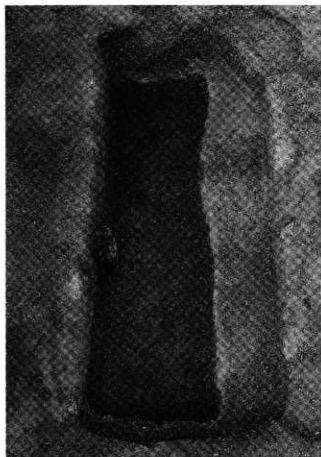
S X802は3基並んだ墓の中央の木棺墓で、木棺に使用した釘が37本出土し、木棺の規模と構造が復元できる。木棺は、墓坑底に厚さ約5～13cmの土を敷いた上の墓坑中央に置かれ、棺底のレベルは北が約2cm高い。木棺主軸はほぼ南北を向く。鉄釘は原位置をとどめているものが24本ある。釘先を上に向けて棺底からほぼ直立して出土するものが北小口側に3本、南小口側に2本ある。また木棺の四隅には、木棺主軸と平行して水平に出土する鉄釘が4本あり、いずれも釘先を棺内側に向け棺底から7～11cm上で出土する。さらに北小口側では、この鉄釘の約15cm上のほぼ同じ位置から、同様な鉄釘が1本ずつ出土する。この鉄釘は釘先を下に向けて出土するが、他の鉄釘の出土レベルなどから、本来は水平だったものが棺材の腐食落下により動いたものと考えられる。東西両側には、側板に沿って木棺主軸方向と直交して水平に出土するものが、西側6本、東側に7本ある。



SX801 平面・土層断面図 (1/20)



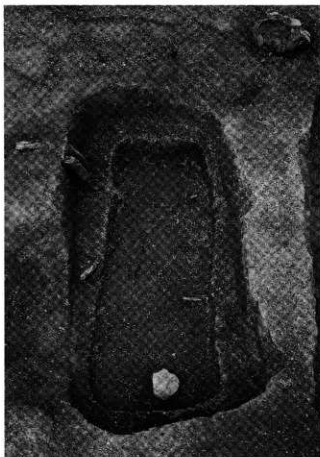
SX802 平面・土層断面図 (1/20)



SX801 全景 (南から)

鉄釘同士の間隔には規則性はなく、いずれも釘先を棺内に向けている。棺底から3~10cm上で出土するものが多いが、約15cmと約26cmとやや上から出土するものもある。後者はその下に同じ方向の鉄釘があり、同じ位置の上下で使用されていたことがわかる。またこの鉄釘には釘先を折り曲げているものがある。これらから、木棺は組合式で、小口板で側板をはさみこみ、それを底板上に置く構造であることがわかる。側板は上下2枚に分かれており、外側に5本の椀木をあてがい底板とともに鉄釘で固定する。椀木の厚さは側板と小口板が約3cm、底板が3~4cm、椀木が約4cmと推定される。鉄釘は24本の使用部位が判明した。底板から打ち込むものが北小口板に3本、南小口板に2本、北小口板から東西側板に打ち込むものが上下2本ずつ、南小口板から東西側板に打ち込むものが1本ずつある。椀木から側板に打ち込む鉄釘は、本来は上下2段あり、各側板に10本ずつ使用されていたと推定されるが、残存するのは西側が6本、東側が7本である。下段の鉄釘には、椀木から側板を貫き底板に至るものと、側板のみに打ち込むものがあるが、規則性は認められない。後者の鉄釘は、棺内にはみ出した先端部分をたたいて折り曲げる。

副葬品はないが、木棺底の南端に花崗岩の自然石が置かれている。



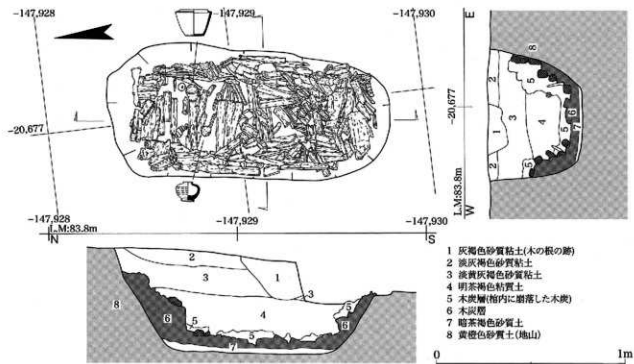
SX802 全景 (南から)

S X803は3基並ぶ墓の東端の木棺墓で、掘形は深さ約0.4mと3基中最も浅く、底の標高も高い。木棺痕跡は不明瞭で、鉄釘は1本出土するが、木棺の復原は困難である。掘形底の一段窪んだ部分を木棺痕跡とすると、長さ2.5m、幅0.75mとなる。主軸は北でやや西に振れる。

出土遺物には鉄鎌1点と鉄釘1点がある。鉄鎌は、墓坑南半部中央の墓坑底から0.16m上で出土しており、木棺蓋上に副葬されたものと考えられる。鉄釘は、墓坑北西部中央の墓坑底から0.24m上で出土し用途は不明。

S X804は、南テラス面に他からやや離れて単独で構築された木棺墓で、鉄釘が2本出土しており、木棺の規模と構造が復原できる。

まず墓坑底に厚さ約3cmの土を敷き、その上に径4cm前後の木炭を木棺主軸と直交方向に並べて、木棺を墓坑の中央に置く。木棺と墓坑の間を木炭で充填した後、木棺の上を土で覆う。棺底のレベルは北が僅かに高い。木棺主軸は北でやや西に振れる。鉄釘は原位置を留めているものが12本ある。釘先を上に向けて棺底からほぼ直立して出土するものが8本あり、北小口側に1本、西側に4本、東側に3本ある。木棺の南西隅を除いた各隅には、木棺主軸と直交して水平に出土する鉄釘が1本ずつあり、いずれも釘先を棺内側に向ける。さらにこの北東隅の鉄釘のやや上からは、木棺主軸と平行してほぼ水平



SX804 平面・土層断面図 (1/20)

に出土する鉄釘が1本ある。これらから、木棺は組合式で、側板と北側の小口板を相欠きにより組合せ、南側の小口板は側板ではさみこみ、それを底板の上に置く構造であることがわかる。棺材の厚さは底板が約1.8cm、側板が1.4~2.0cm、北小口板が約1.4cmと推定される。出土位置と木質の遺存状況から鉄釘14本の使用部位が判明した。底板から西の側板に打ち込むものが4本、東の側板に打ち込むものが3本、北の小口板に打ち込むものが1本、側板から南北両小口板に打ち込むものが各隅に1本ずつ、さらにその上に北小口板から両側板に打ち込むものが1本ずつある。使用部位が不明な8本の鉄釘のうち、出土位置から木棺に使用したと考えられないものが1本ある。木棺を覆う木炭層の上面の北端から出土したもので、棺底から約0.27m上になる。釘先を西に向けており、長さ約20cmで木質が残る。

副葬品には須恵器と土師器の壺が1点ずつある。木棺内の北西側に須恵器が、北東側に土師器があり、棺底から出土したため棺内に副葬されたことがわかる。壺の中に内容物はなかった。

SX805は、丘陵上に1基のみある木棺墓である。深さ約0.2mと残存状況は悪く、木棺痕跡は検出出来なかったが、木棺に使用した鉄釘が11本出土し、木棺の規模と構造が復元できる。

木棺は墓坑底から約3cmほど上の墓坑の西端に寄せて置かれる。墓坑主軸は北でやや西に振れる。鉄釘は原位置を留めているものが3本ある。釘先を上に向けて棺底からほぼ直立するものが東側と西側に1本ずつある。南



SX804 全景 (南から)

西隅には木棺主軸と直交して水平に出土する鉄釘が1本あり、釘先を棺内側に向ける。この他にも出土位置からおおよその原位置が推定されるものが数本ある。棺材の厚さは側板が約1.8cm、底板が約3.0cmである。これらから、木棺は組合式で、側板で小口板を挟み込みそれを底

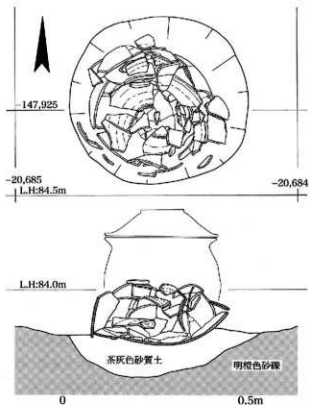
板上に置く構造であることがわかる。鉄釘は9点の使用部位が判明した。底板から両側板に打ち込むものが各2本ずつ、底板から北側の小口板に打ち込むものが1本、側板から南北両小口板に打ち込むものが各側に1本ずつある。残り2点の使用部位は不明だが、鉄釘に残る木質から、側板から小口板に打ち込んだものが転落したものと想定出来る。副葬品はない。

SX806は土器棺墓で、土師器甕に土師器盤を伏せて蓋にする。掘形は径約0.5mの円形である。植物による遺構面の土壌化がすすんだため、土器の大半は表土層内にあり、検出面から浮いた状態となっている。甕内には土が堆積するのみで、骨や副葬品はなく、甕底から約5cm上には蓋の盤が落下していた。甕の容量から蔵骨器とも考えられるが、炭化物の出土は火葬墓か否かは不明。甕は胴部径約30cm、高さ約29cmで、高さ約7cmの盤で蓋をすると、土器棺の高さは約36cmに復原できる。これは現在の地山面から約0.33m上になり、土壌化分の約0.13mを差し引いても、約0.2m以上の土が削平・流出したことになる。しかしながら、SX806のある場所は南テラス面の奥部で、丘陵上から土砂の堆積こそあれ、南テラス面全体を約0.2m低くするような大規模な削平・流出があったとは考えられない。このことから、墳丘盛土があった可能性が高い。

SX801～803とSX806の4基は狭い範囲に重複することなく築かれており、何らかの標識が地表にあったものと思われる。また、SX806のあり方から墳丘盛土が想定できることから、これら4基は一つの墳丘内に築かれた一群のものの可能性が高い。この中で一番西側のSX801が、帯金具などの副葬品をもち、木棺の構造も整然としていることから優位性が認められる。またSX801とSX802は主軸がほぼ真北を向くのに対し、SX803は主軸が北でやや東に振れ、墓坑底のレベルも前二者に比べ高いことから、SX803は西の2基に比べ新しいと考えられよう。これらのことからSX801→SX802→SX803の築造順序が想定される。SX806出土土器から、9世紀前半頃の時期と考えられる。

単独で存在するSX804・805とこれら4基の一群との関係は不明だが、SX804の主軸がSX803と同様に北でやや東に振れており、新しい要素として指摘できる。またこの2基の木棺は、成人遺体を納めるには全長が短く、未成人の埋葬か火葬骨を納めたことが考えられる。

土器埋納遺構 SX807は、径約0.15mの平面円形の掘形内、土師器甕を須恵器の杯蓋で蓋をして埋納した遺構で、土師器甕は胴部径約6.5cmで、内面は板状工具によるナデ、外面は未調整で指頭圧痕が残り、須



SX806 平面・立面図 (1/10)



SX806 全景 (南から)

恵器杯蓋は径約12cmである。蓋は甕内に崩れ落ちており、内容物は残存していなかった。

IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱14箱、瓦類が2箱、銅銭、鉄釘、フイゴ羽子、鉄滓、砥石、石鏝がある。土器類は大半が8世紀後半～9世紀前半の土師器と須恵器で、他に弥生時代後期と考えられる土器が数点ある。瓦類は奈良・平安時代のもので、軒平瓦2点の他は、丸瓦が89点(3965g)、平瓦が65点(4826g)、丸・平不明瓦が64点(745g)と少量である。遺構出土のものは遺構一覧表に記し、ここでは古墓出土の遺物を報告する。

IはSX803出土の鉄鎌で、先端部分は欠損し基部の

みである。着柄のための折り返しが基部にあり、刃部幅は2.7cmである。錆化がはげしい。

2～4はSX801出土である。2は銅製巡方の表金具で、縦2.4cm、横2.6cm、厚さ0.5cmであるが、周辺部が劣化しておりもう少し大きくなる。下半に長方形の透かしがあり、裏の四隅には紙足が付く。表面の劣化が著しい。3は銅製蛇尾の表金具で、縦2.9cm、横4.8cm以上、厚さ0.5cmである。裏には紙足が3足付き、先端を欠損する。4は神功問寶で径は25.43mmである。

5・6はSX804出土の須恵器壺Aのミニチュアと土師器壺Eである。5は口径2.05cm、器高4.1cm、胴部径5.0cmある。内外面をロクロナデ調整する。灰白色の胎土で肩部には自然軸がかかる。6は残存状態が悪く、口縁端部は劣化して失われ、外表面も剥離が著しい。最大径7.7cm、器高5.2cm以上である。内面はヨコナデ調整で、外面は劣化により調整不明である。この他鉄釘が97本出土しており、各墓出土の本数は前掲の検出遺構一覧表に記す。すべて角釘で頭部を作りだす加工等はない。

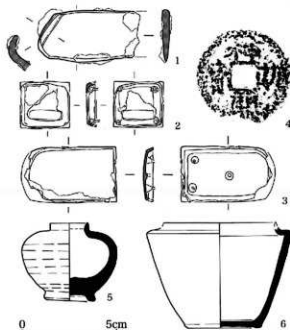
7・8はSX806で土師棺に使用されていた土師器甕と甕で、いずれも口縁部の一部を失っているがほぼ完全に復元できる。7の甕は、口径30.0cm、器高7.1cmである。底部は輪高台で、ラッパ状に広がる口縁部の端部を内側に折り返す。外面はヘラケズリ調整後に荒いヘラミガキ調整し、内面は丁寧なヨコナデ調整後、口縁端部付近をヘラミガキ調整し、見込み部と体部に暗文を施す。8の甕は球胴丸底のいわゆる「都城型」甕で、口径29.5cm、器高28.4cm、胴部径30.5cmである。体部を無文のタタキ成形した後外面をハケメ調整する。口縁内面はヨコハケ調整後、ヨコナデ調整する。外面に煤の付着はない。甕の特徴から9世紀前半頃のものと考えられる。

V 調査所見

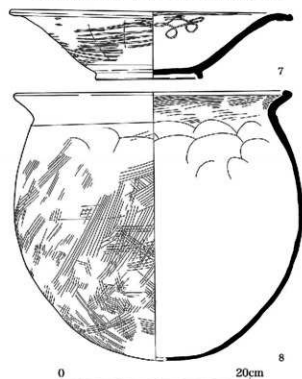
今回の調査成果は、大きく二点を指摘できる。

一点目は、平城京の西京極大路に隣接した場所において、奈良・平安時代の掘立柱建物群を検出したことである。建物群は、丘陵斜面をひな壇式に造成し、溝で区画した中に築かれ、8世紀後半～9世紀前半の間に概ね3～4時期の変遷が迫る。従来西の京丘陵一帯の宅地利用は疑問視されていたが、近年の発掘調査で丘陵上から建物群が確認される一方、谷部では深い谷の堆積土だけで遺構面が確認されない例が多い。本調査により西京極近くでも建物群が確認できたことから、比較的平坦で面積のある丘陵上は、奈良時代に宅地利用されていた可能性が高いといえよう。なお発掘区西側に推定される西四坊大路は確認できなかった。

二点目は、平安時代前期（9世紀前半頃）の古墓群を



HJ 第543次調査 SX801・SX804 出土遺物 (1/2)



HJ 第543次調査 SX806 出土土器 (1/4)

確認したことである。古墓は木棺墓が5基、土師器墓が1基であり、すべて丘陵南側に築かれる。鉄釘の出土状況から木棺の構造が復元できたが、副葬品は少なく被葬者像などは不明である。今回の調査地の北西約110mの所の五条山古墳¹⁾に次いで、西の京丘陵では2例目の古墓となる。丘陵上での発掘調査例は少なく、さらに古墓が発見される可能性があり注意が必要である。これらの古墓が奈良時代に遡るものかは検討を要するが、平城京周辺の葬地を考える上で貴重な資料と言えよう。(中島和彦)

1) 橋本裕行「奈良市五条山古墳」『書報』第88号 1995

17. 平城京跡（左京三条四坊十三坪）・油坂遺跡の調査 第544次

事業名	共同住宅建設	調査期間	平成18年2月23日～3月29日
届出者名	近鉄不動産株式会社	調査面積	176㎡
調査地	奈良市大宮町二丁目82番地40、82番地50	調査担当者	武田和哉

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条四坊十三坪の北辺中央付近に該当している。調査地の周辺では過去に調査事例が数例あり、縄文時代の土坑、弥生末～古墳時代初頭にかけての旧流路や、奈良時代の掘立柱建物・塀・井戸・条坊側溝などの遺構が検出されている¹⁾。

こうした成果を踏まえつつ、今回の調査では、南北約26m、東西約8mの発掘区を設定して調査を実施した。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、造成土(0.3～0.5m)以下、黒褐色土(0.1～0.2m 旧耕土)、茶褐色土(約0.05m 旧床土)、暗灰褐色土(0.1～0.15m)、淡茶灰色土(約0.1m)と続き、現地地表下約0.6～0.7mで暗灰褐色粘質土(0.1～0.2m 整地層)に達する。この下に暗黄褐色粘土の地山層がある。遺構検出作業は奈良～平安時代前半の遺構は整地層の上面で実施し、奈良時代以前の遺構は地山の上面で実施した。整地層上面の標高は64.0m前後、また地山上面の標高は、発掘区北側で約64.5m、南側で約63.9mである。

III 検出遺構

検出した主要遺構には、奈良時代以前の溝、奈良～平安時代前半の掘立柱建物・掘立柱列・井戸・溝などがある。詳細は次頁の遺構一覧表の通りである。

奈良時代以前の遺構 S D01～03は、発掘区の西辺中央から南端にかけて検出した溝である。断面はV字またはU字状を呈する。概ね北西より南東方向へと流れつつ合流している様相である。出土遺物は極めて少なく、土器の小片がわずかに出土したのみで、詳細な時期は不明。遺構の重複関係から、後述の奈良～平安時代前半の掘立柱建物・柱列や井戸よりも古いことが明らかである。

奈良～平安時代前半の遺構 SA04・05・08およびSB06・07は、発掘区の中央～南側の部分で検出した掘立柱列および建物である。柱穴の残存状況は極めて悪く、遺構面が相当程度削平されている可能性が高い。特にSA04と05は柱列が北に折れ、建物の一部である可能性がある。SB07は柱穴の配置や残存状況を勘案すると、北側部分が削平を受けている可能性がある。また、このほかにもいくつか柱穴を検出しているが、遺構面が削平されている影響もあって、明確に建物や柱列として



H J 第544次調査 発掘区位置図(1/5000)

まとまるものはない。SE09は、発掘区中央で検出した井戸である。柁材は残存していない。埋土からは奈良時代後半の遺物が出土した。S D10・11は、発掘区北側で検出した東西方向の溝である。S D11は東側で急激に浅くなり、幅も一定しない傾向であるのに対して、S D10は幅・深さともに比較的一定した様相を呈している。埋土から奈良～平安時代前半の土器・瓦片が出土した。S D10の溝心位置は、X = -146.419.9 Y = -16.510。

IV 出土遺物

遺物整理箱43箱分の遺物が出土。その内訳は、弥生土器、古墳時代の土師器、奈良時代の土師器・須恵器・墨書土器・製塩土器・緑釉陶器・灰釉陶器・硯(円面・風字)、軒丸瓦(型式不明2点)・軒平瓦(6663B、6663C各1点)・丸瓦・平瓦・柱根・曲物底板・桃核、時期不明の玉菰・鉄釘・埴塼などである。大半は奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・瓦片が占める。このうち、軒瓦や鉄釘は整地層から、また墨書土器はSE09から出土。

V 調査所見

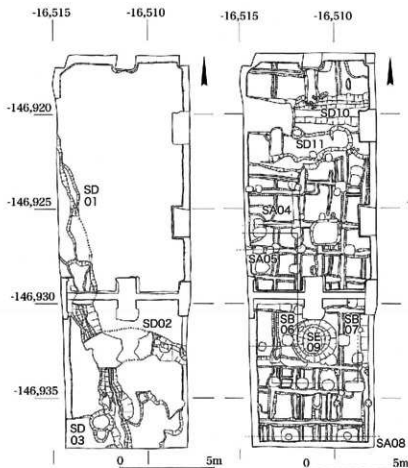
本調査で検出したS D01～03は、時期特定の手掛かりとなる遺物が出土していないが、隣接地の調査で検出した弥生～古墳時代の旧流路に接続する可能性がある。またS D10は、周辺における調査成果から得られた三条条間南小路南側溝の位置よりはやや南寄りに位置していることから、同側溝の南側に想定される築地内側の雨落ち溝である可能性が考えられる。(武田和哉)

1) 奈良市教育委員会「油坂遺跡・平城京跡(左京三条四坊十三坪・東四坊大路)の調査第461・465・479次」『奈良市埋蔵文化財調査 概要報告平成13年度』2004 このほか、奈良市教育委員会「平城京左京三条五坊三坪・油坂遺跡の調査第422次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告平成10年度』および奈良県立橿原考古学研究所「奈良市平城京1995年度調査概報 2.左京三条五坊三坪の調査」『奈良市油坂遺跡調査概報1995年度(第一分冊)』1996など。

H J 第 544 次調査 発掘遺構一覽表

遺構番号	型 形			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)		
S D01	斜行溝	長さ18以上×幅0.7～1.2	0.1～0.5			時期不明の土器片	
S D02	斜行溝	長さ4以上×幅1.0～1.2	0.3～0.4			時期不明の土器片	
S D03	斜行溝	長さ6以上×幅2.5以上	0.2以上			時期不明の土器片	
S E09	円形	径約2.2m	2.55	不明		奈良時代後半の須恵器・土師器	砂材抜き取り
S D10	東西溝	長さ13.5以上×幅0.2～0.4				奈良～平安時代前半の須恵器・土師器	築地内落ち溝か?
S D11	東西溝	長さ13.5以上×幅0.2～0.4	0.50			奈良～平安時代前半の須恵器・土師器	

遺構番号	棟 (列) 方向	規模		築行全長		柱間寸法 (m)			備考
		桁行・築行 (m)	桁行全長 (m)	南北2.1	南東2.1	南東2.1	南東2.1	南東2.1	
SA04	東西・南北	1以上×1	東西2.1以上	南東2.1	南東2.1	南東2.1	南東2.1	南東2.1	柱穴深さ0.2m前後・建物の一部の可能性・L字に屈曲
SA05	東西・南北	2以上×2	東西3.0以上	南東3.0	南東3.0	南東1.5等間	南東1.5等間	南東1.5等間	柱穴深さ0.1～0.3m・建物の一部の可能性・L字に屈曲
SB06	東西	1以上×2	2.1以上	4.2	2.1	2.1	2.1	2.1	柱穴深さ0.1m前後・北葺の出 (2.1m)
SB07	南北	3×1以上	1.5以上	4.5	1.5	1.5等間	1.5等間	1.5等間	柱穴深さ0.1～0.2m・建物北側は階平により消滅
SA08	東西	1以上	3.0以上		3.0				柱穴深さ0.4～0.5m・軒梁直径0.22m

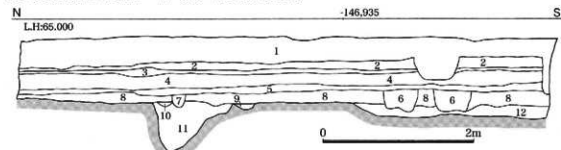


発掘区全景 (奈良～平安時代の遺構・南西から)



発掘区全景 (奈良時代下層遺構・北西から)

H J 第 544 次調査 発掘遺構平面図 (1/200)
(左 奈良時代以前の遺構面 右 奈良～平安時代の遺構面)



- 1: 造成土 4: 暗灰色土 (包含層) 7: 暗灰色粘質土 (素掘溝埋土) 10: 暗灰色土
 2: 黒褐色土 (旧耕土) 5: 淡茶灰褐色土 (包含層) 8: 暗灰褐色土 (整地層) 11: 暗茶褐色粘質土 (S D02 埋土)
 3: 茶褐色土 (旧床土) 6: 暗灰褐色粘質土 (素掘溝埋土) 9: 暗黄褐色土 (素掘溝埋土) 12: 暗茶褐色粘質土 (S D03 埋土)
 地山: 黄灰色または青灰色粘土

H J 第 544 次調査 発掘区東壁南半部土層断面図 (1/50)

18. 平城京跡（左京五条二坊七坪）の調査 第545次

事業名	宅地造成	調査期間	平成18年3月9日
届出者名	(株)ファーストホーム	調査面積	52㎡
調査地	奈良市大安寺町544-1 他	調査担当者	三好美穂

I はじめに

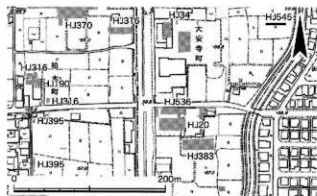
調査地は、平城京の条坊復原では左京五条二坊七坪の北辺中央部付近にあたる。これまでに七坪内での発掘調査例はないが、北西の一坪の調査（市HJ第278次調査・国第156-27次調査）では、一坪北辺の築地雨落ち溝、廂付の掘立柱建物や弥生時代の方形周溝墓が、西隣の二坪の調査（市HJ第34次調査）では、二坪の南北を四等分割する東西方向の掘立柱塼や建物が発出されている。七坪内においても隣接地同様に良好な状態で遺構が残存している可能性が想定されたが、調査期間等の制約から、調査地内の遺構の確認と土層堆積状態を記録するにとどまらざるを得なかった。

II 基本層序

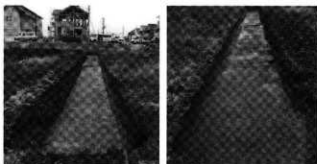
発掘区内の基本的な層序は、上から暗褐色土（耕土）、淡灰色粘砂（床上）、明黄褐色粘土と続き、地表面から約0.2mで奈良時代の遺構面である灰色粘砂または暗黄褐色土にいたる（標高：約58.8m）。さらに遺構面の下には、茶褐色粘土、淡茶灰色粘砂、明褐色粘土が堆積している。

III 検出遺構

奈良時代の遺構面から掘り込まれる土坑（SK01）1基、素掘り溝（SD02・03）2条、溝状遺構（SX04）を検出した。SK01は、東西0.9m、南北1.0mの平面方形の掘形である。遺構は完掘していないので深さは不明。埋土である黄褐色粘土には土師器細片を包含する。SD02は、幅0.2mの南北方向の素掘り溝。溝内には暗褐色土が堆積していた。SD03は幅0.6～0.8mの斜行する素掘り溝で、北で東に振れる。溝内には暗褐色土が堆積する。SX04は幅0.4～1.2mの溝状の遺構で、遺構内には暗褐色粘土が堆積する。さらに北壁断面において、奈良時代の遺構面の下層に堆積している茶褐色粘土上面から掘



H J 第 545 次調査 発掘区位置図 (1/5000)



発掘区全景（東から）

発掘区全景（西から）

られている小穴を確認した。深さは約0.1m。遺構内には明茶灰色粘土が堆積していた。SD02・03、SX04、小穴からは出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、層位や周辺の調査成果からみて、小穴は弥生時代の遺構の可能性が考えられる。

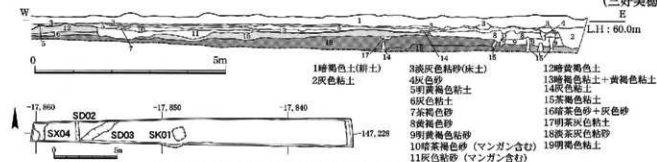
IV 出土遺物

奈良時代の遺構面直上から8世紀代の土師器瓶片、甕の胴部破片、製塩土器片が3点出土したにとどまる。

V 調査所見

今回の調査は、小規模ながらも奈良時代とそれ以前の遺構面が良好な状態で残存することが判明した。

(三好美穂)



H J 第 545 次発掘区 北壁土層図 (1/100)・発掘区遺構平面図 (1/300)

19. 平城京跡（左京八条四坊十四坪）の調査 第546次

事業名	宅地造成	調査期間	平成18年3月13日～3月17日
届出者名	(有) やすらぎ住宅	調査面積	63.5㎡
調査地	奈良市東九条町722-1 他	調査担当者	三好美穂

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京八条四坊十四坪の北東部にあたり、届出地の東端には東四坊大路西側溝が想定されている。遺構の確認と東四坊大路西側溝を検出することを目的に東西約18m、南北3.5mの発掘区を設定し調査を行った

II 基本層序

発掘区の基本層序は、造成土の下に、黒褐色土・明茶褐色土（耕土）、黄褐色粘土（床土）、8世紀代の土器片を含む橙褐色粘土～茶褐色粘土と続き、地表下約0.5mで遺構面である茶黄色粘土（標高約63.2m）にいたる。

III 検出遺構

奈良時代の素掘り溝（SD01・02）、掘立柱列（SA03）、土坑（SK04・05）等を検出。SD01は東西幅約2.0mの南北溝で、深さは約0.4m。溝内には上から8世紀代の土器片を包含する褐茶灰色粘土、暗青灰色粘土、灰黄色粘土が堆積。溝心の国土座標は、X=-148,985.00、Y=-16,449.95。SD02は東西幅約4.0mの南北溝で、深さは約0.7m。断面形は逆台形状であり、溝底は広く平坦な形状である。溝内には上から8世紀代の土師器・須恵器細片を包含する褐茶灰色粘土、明茶灰色粘土、明茶褐色粘土が堆積する。溝心はX=-148,985.00、Y=-16,455.00。SA03は東西方向の柱列で、柱間寸法は1.8m。深さは両柱穴とも約0.5m。SK04と05は重複しており、SK04が古い。出土遺物はない。SK05は東西幅4.3m、南北1.5m以上、深さ約0.3mの浅い皿状の土坑である。

IV 出土遺物

遺物整理箱で1箱分出土。SD01・02、柱穴、SK05、遺物包含層から出土した8世紀代の土師器・須恵器の細片や丸瓦・平瓦がある。その他、SD01から土馬片3点、SD02からは土馬片2点、フイゴの羽口2点が出土した。

V まとめ

左京四条付近におけるこれまでの調査で検出された東四坊大路西側溝と今回検出した溝の位置関係から、SD01は東四坊大路西側溝とみられる。

SD01と02の間に築地塀を想定すると（溝心間距離約5.0m）、SD02をその雨落ち溝とみることもできないが、溝幅が広く築地痕跡もないため断定できない。

(三好美穂)



H J 第 546 次調査 発掘区位置図 (1/5000)



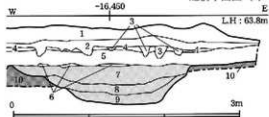
発掘区全景 (東から)



発掘区全景 (西から)



H J 第 546 次調査 発掘区遺構平面図 (1/2000)



- | | | |
|---------|----------|---------------|
| 1 黒褐色土 | 5 茶褐色粘土 | 9 灰黄色粘土 |
| 2 明茶褐色土 | 6 橙褐色粘土 | (7~9: SD01埋土) |
| 3 灰色粘土 | 7 褐茶灰色粘土 | 10 茶黄色粘土 |
| 4 黄褐色粘土 | 8 暗青灰色粘土 | (埋土) |

H J 第 546 次調査 発掘区北壁(東端)土層断面図 (1/500)

20. 平城京跡（朱雀大路）の調査 第547次

事業名	展示場新築	調査期間	平成18年3月20日～3月29日
届出者名	(株)タジマモーターコーポレーション	調査面積	44.8㎡
調査地	奈良市三条大路三丁目444-6、444-7	調査担当者	三好美穂

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では朱雀大路路面の東辺部にあたる。調査地のすぐ西側の敷地では、過去に市HJ第403次調査を実施しており、下ツ道の東側溝や古墳時代中期後半以降の掘立柱建物、素掘り溝を検出している¹⁾。本調査は、敷地の南端部に東西方向の発掘区を設定し、朱雀大路の路面と古墳時代の遺構を確認することを目的として実施した。

II 基本層序

発掘区の基本層序は、造成土の下に黒灰色土（旧耕土）、灰色砂・茶褐色粘土（旧床土）、須恵器・土師器・瓦器片を含む灰色細砂と続き、地表下約1.0mで暗黄褐色粘土（標高約63.9m）にいたる。大半の遺構は、この暗黄褐色粘土層の上面から掘削されているが、さらにこの下層の暗茶褐色粘土層上面（標高約63.6m）からは後述する古墳時代の土坑（SK01）が掘り込まれていた。

III 検出遺構

古墳時代の遺構 SK01は、発掘区西端で検出した東西0.9m以上、南北2.6m以上の不整形な土坑。断面形はU字形を呈し、深さは約0.2～0.3m。土坑内には上から明茶褐色粘土、暗茶灰色粘土、暗灰色粘土が堆積し、暗茶灰色粘土から6世紀後半以降の土師器・須恵器が出土。

奈良時代の遺構 発掘区は、周辺地における調査成果との位置関係から朱雀大路路面に位置しているが、路面に整地などの痕跡は見られない。暗黄褐色粘土層の直上には、13世紀代の瓦器を包含する灰色細砂が堆積していることから、路面は削平を受けていると考えられる。

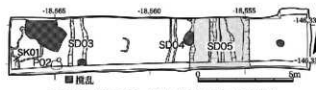
時期不明の遺構 小穴（P02）と溝（SD03～05）がある。P02は、東西0.6m、南北0.4m、検出面からの深さは約0.1m。小穴内には土師器壘片を包含する灰色砂と黄褐色粘土が堆積する。SD03は、幅0.6～1.0mの南北溝で、検出面からの深さは0.1m。溝内には灰色細砂を含む灰色粘土が堆積する。出土遺物はない。SD04は、幅0.3～0.5mの南北溝で、検出面からの深さは約0.1m。溝内には灰色砂混じりの黄灰色粘土が堆積する。出土遺物はない。SD05は、幅3.2mの南北溝。溝内は上から橙褐色～黒褐色粘土と灰色砂の互層、茶灰色細～中粒砂、灰色粘土と灰色砂～茶灰色砂が堆積しており、検出面から深さ1.0mまで掘り下げたが、湧水が



HJ 第 547 次調査 発掘区位置図 (1/5000)



発掘区全景（西から） SD05 全景（南から）



HJ 第 547 次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)

著しく途中で断念した。最上の埋土には、粘土ブロックが多く含まれ、人為的に一挙に埋められたものとみられる。出土遺物はない。

IV 出土遺物

遺物整理箱で1箱分出土。SK01から6世紀以降の土師器壘・壘片、須恵器杯片が少量出土。P02から土師器壘が少量出土しているが、小破片のため時期は不明。遺物包含層からは円筒埴輪片、6世紀以降の須恵器杯片、8世紀代の土師器（杯・皿・壘）、須恵器（杯・蓋・壘・壘）の小破片、平瓦片、13世紀代の瓦器枕片が出土。

V 調査所見

朱雀大路路面の整地は確認できなかったが、古墳時代の遺構の広がりを知る手がかりを得た。（三好美穂）

1) 奈良市教育委員会「平城京朱雀大路・下ツ道・尼辻東方遺跡の調査 第403次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書平成10年度』1999

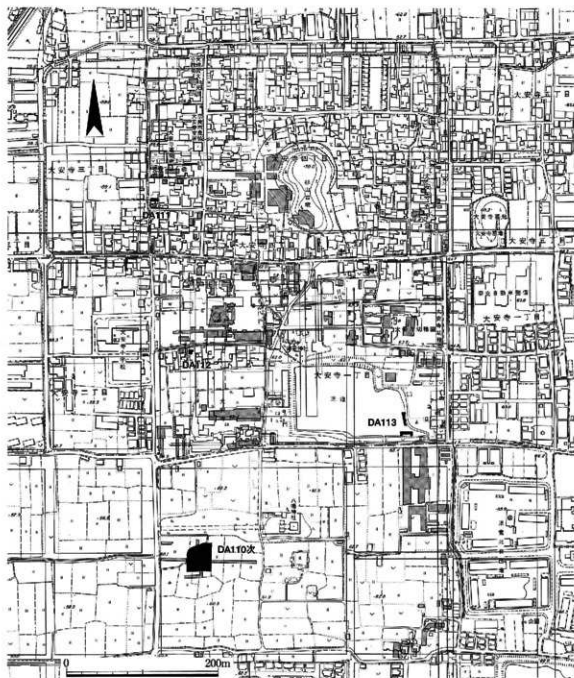
21. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成17年度に、史跡大安寺旧境内において計4件の調査を実施した。第110次調査は「塔院地区」の保存整備事業に係る発掘調査であり、平成13年度より足かけ5年にわたり実施してきた西塔

地区の調査である。また、第111・112次は個人住宅改築に伴う現状変更許可申請に係る発掘調査で、第113次は、ため池改修工事に伴う現状変更許可申請で、いずれとも条件付き許可となったものである。

平成17年度史跡大安寺旧境内の調査発掘調査一覧表

遺跡名	調査回数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
史跡大安寺旧境内	DA110	遺跡範囲確認	東九条町1340他	2005/7/19～2006/1/17	1090㎡	松浦
史跡大安寺旧境内	DA111	個人住宅改築	大安寺西丁目1042-2他	2005/8/1～8/5	30㎡	武田
史跡大安寺旧境内	DA112	個人住宅改築	大安寺八幡町1310-3	2005/10/25～11/16	43㎡	池田
史跡大安寺旧境内	DA113	ため池改修	大安寺町ヒラキ1238-1	2006/2/6～3/9	102㎡	池田



史跡大安寺旧境内の調査発掘区位置図 (1/5000)

(1) 西塔地区の調査 第110次

I はじめに

本調査は、平成13年度から継続して行なっている史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る西塔地区の調査である。本年度は、これまで未調査の塔跡南西部と昨年度調査の及ばなかった南東部下層（計338㎡）の調査を主体とし、その後、これまでの調査区を再発掘して塔基壇全体の写真撮影および補足調査を行なった。

II 基本層序

層序は、基本的にこれまでの調査地と同様であり、基壇上面は、0.1～0.2mの表土（腐植土等）の直下が基壇盛土となっており、基壇周囲は塔の被災によって崩落した瓦が堆積している。基壇周囲の瓦の堆積状況も、これまでの状況と一致し、上から0.3m前後の近世～現代の開削土・耕作土、0.2～0.3mの赤色焼土、0.05～0.1mの淡灰色砂質土、0.1～0.2mの黄色粘土と続き、基壇の基底面（延石下底面）に達する。赤色焼土層は火災による塔からの崩落物の堆積であり、黄色粘土層は火災以前の被災による崩落瓦を埋め固めた整地層と考えられ、ともに大量の瓦を含んでいる。

今回、補足調査として基壇の外側を一部断り削った結果、掘り込み地業は行われていないことが確認できた。北側部分での基壇基底面以下の堆積は、0.01m程度の茶色砂の下に、0.15～0.2mの灰褐色シルトが1～4層重なる整地層がある。これは延石前面から約3m外側まで広がる基壇と一連の版築層の裾を覆っており、基壇築成後の周囲の整地によるものである。基壇築成前の堆積層は、0.1m前後の暗灰色砂混じりシルトの整地層、0.3m前後の灰色粘質シルト（弥生時代遺物包含層）と続き、砂～シルトの無遺物層（地山）に達する。この北側の地山上面の標高は59.0～59.1mであるが、基壇



西塔基壇北側土層断面（南東から）

南側では59.4mとやや高い砂礫層の地山になっており、さらに南へ向かって緩やかに高くなっていく。

なお、延石下底の標高は基壇全周でほぼ59.7mである。

III 検出遺構

塔跡土壇南西部は、その形状から当初より耕作によって削られているものとみられたが、調査の結果、基壇自体も南西部は大きく削られていることが判明した。特に南辺には基壇外装の切石は全く残っておらず、南階段も西半は削平されていた。基壇全体をみると、塔の南側柱筋以南については南階段の一部を除き切石は残存していないことがわかった。

本調査では、これまで北半部のみ検出していた西階段の全幅が明らかになった。西階段は地覆石に相当する最下段の切石が全て残っていた。長方形の切石が5個連なって一段を形成しており、その両端には登巻石をはめ込むための方形の掬り込みがある。段の幅は5.15mあり、掬り込みの心間間はほぼ4.5mである。この数値はこれまで検出した南・北・東の階段より広く、東階段とは0.25mもの差がある。

基壇に付随する遺構としては、昨年度検出したものと同様な柱穴を確認し、それらが基壇を囲むように方形に並んでいることが明らかになった。柱穴は直径0.3～0.4mの平面円形で、深さ0.3m前後。南東部で5箇所検出し、削平されているが南西部でも同様の掘形が4箇所認められた（P1～9）。埋土は黄色粘土に瓦が大量に混じる整地土と同質であり、整地の際に同時に埋められたと考えられる。したがって時期的な幅を考慮すると、塔修復の際の足場穴である可能性が考えられる。

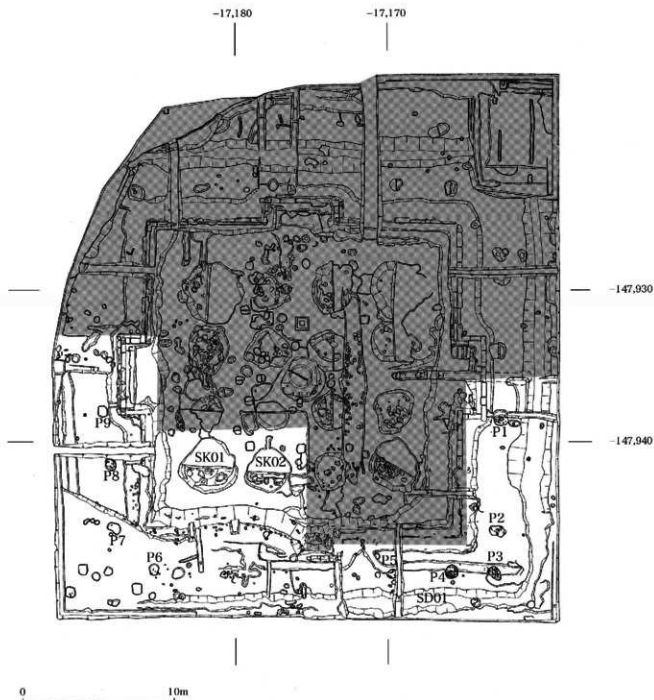
S D01は基壇から約5m外側を、基壇辺に並行して延びる溝状遺構で、これまでの検出部の延長を確認した。南東角でL字に曲がっており、周溝状に基壇を囲んでいることが判明した。幅2m前後、深さ0.2m前後で明瞭な肩をもたない浅い窪み状の溝である。この溝も黄色粘土の整地上で同時に埋められていることから、必ずしも塔自体に必要な機能をもっていたものではない可能性が考えられる。

基壇上面では礎石抜取土坑S K01・02を検出した。礎石は心礎以外全てが抜き取られていることが確認できた。南西角のS K01が直径約1.8m、深さ約0.3m、S K02が直径約1.4m、深さ0.25m。今回で全ての礎石推定位置において抜取痕跡を確認したが、四隅のものが一回り大きく深いという傾向がある。

基壇構築の工程についてみると、掘り込み地業は行な

っておらず、まず基礎築成予定地を地形に即して広い範囲で整地している。その整地層の上に、階段の出よりも広い範囲で版築による盛り土を行なっているが、版築に際しては外周に堰板を設けず、裾部にかけてなだらかな傾斜をつけ、その後、版築層の下端から0.2m程度を残して、それより上部を当初計画の寸法まで削りこんで基礎を成形している。よって、延石の下には厚さ0.2m程度の基礎と一連の版築層があり、それが延石端より3mほど外へ向かって下りながら広がっている。この後、最終的にこの基礎外に広がる版築層も含めて整地上で覆い、基礎周囲を水平にして全体を仕上げたことがわかる。

基礎の版築に関しては、大きく3つの層に分かれることが確認できた。下層は延石下約0.2mから上に0.5mほどで、厚さ3～10cmの灰褐色シルトや褐色シルトの薄層が重なり非常に硬い。中層はその上厚さ約0.4mの部分であり、厚さ1～3cmの黄色粘土と灰紫褐色砂質土の互層が見事な縞模様をなしている。上層は淡灰褐色シルトに黄色粘土が断続的に帯状に挟まれる層で比較的軟らかく、基礎上面が削平されているため厚さ約0.3m分が残る。また、上・中・下の大きな層層には付近の地山に認められる砂礫層が0.05m程度盛られており、中層には径20cm程度の円礫がわずかに含まれる。



DA第110次調査 発掘区道構図 (1/250・アミ拵部分は既調査区)



西塔基壇南西部調査区全景（西から）



西塔西階段（西から）

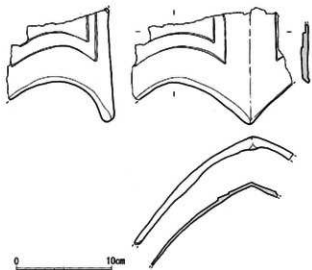
IV 出土遺物

瓦類2164箱、土器33箱、金属製品7箱に及ぶ遺物が出土した。

瓦類には軒丸・軒平・丸・平瓦および鬼瓦がある。軒瓦については、軒丸瓦は6138型式C b種と7251型式A種、軒平瓦は6712型式A種と同B種のそれぞれ2種が大半を占める。土器は13世紀後半～14世紀前半の瓦器が多く、8世紀の須恵器、10世紀後半の土師器も少量認められるが塔との直接関係は不明である。

注目すべきものとして風鐸片が1点ある。縦12cm、横20cm、重さ600gの鐸身裾部の破片である。推定復原される大きさは、高さ45～55cm、直径28～30cm、重さ10～12kg程度となる。表面には袈裟禪文が施されており、上半部に配されていたと考えられる乳の破片が市DA第105次調査で出土している。

これまで西塔で出土した2点の完存する風鐸は、当初その大きさ（高さ約30cm）から軒先に吊り下げられたものと考えていたが、今回出土した風鐸の大きさと同様



DA第110次調査 出土風鐸（1/4）

から考えて、こちらが軒先に吊り下げられたものであり、前2点は相輪に吊り下げられたものと判断できる。

V 調査所見

本調査区は遺構の残存状態が悪いと予測された部分であり、これまでに比べ金属製品の出土も少なかったが、階段規模の不統一や、大型風鐸片の出土など新たな知見や資料を得ることができた。

西階段の広さに関して、これによって塔の中の間の柱間について再考の余地が出てきたともいえるが、塔初層の平面規模が一辺約12m（40尺）であることは他の遺構寸法との関係からみて間違いないと考えられるため、中間を約4.5m（15尺）とする柱間のバランスに違和感があるのは否めない。また、敷地との関係から西が正面とも考え難く、他の切石の施工状態からみても、それほど厳密な規格で施工されていなかったと考えられる。

基壇版築については、明確な掘り込み地盤は認められず、地形に合った整地によって地盤を固めていることが判明した。これまでの調査から、塔院の一角は後背湿地にあたり、特に基壇北半の下層は旧河川を伴う砂地になっていると判断され、ある程度広い範囲での整地が必要であったと考えられる。また、基壇本体は版築で積み上げた盛土の締まった中心部を用い、周辺部を削り込んで成形するという手法がとられていることがわかった。

新たに出土した大型の風鐸片は、結果として、これまでに出土している相輪に吊り下げられた風鐸の大きさを改めて認識させることになった。それから推定される相輪の高さは20mを超える巨大なものとなり、基壇規模から推定される西塔の威容を裏付けるものである。

西塔地区の調査については、本年度が5ヵ年計画の最終調査となる。しかし、塔の周囲に関しては不明な点も多く残っており、特に回廊や築地塀については明確な痕跡が確認できておらず、塔院の全容解明は今後の課題となる。（松浦五輪美）

(2) 西面築地地区の調査 第111次

I はじめに

調査地は、大安寺旧境内の伽藍復原では主要伽藍の北北西に位置し、西面築地および東三坊大路東側溝が想定される位置に該当する。調査地の北および南の隣接地では、過去に調査事例が2例（市DA第1次、同第37次調査）¹⁾あり、それぞれ南北方向の溝を検出しており、それらを東三坊大路東側溝に比定する見解が提示されている。これらの成果を踏まえ、本調査では大安寺西面築地の確認を主要な目的として東西10m、南北3mの発掘区を設定し調査を行った。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、上から順に、造成土(0.1～0.3m)、部分的に淡黄灰色土や暗茶灰色土の堆積がみられ、その直下が遺構面である。また、発掘区の中央付近には厚さ約0.2m、幅2m前後で黄灰色粘質土の堆積がみられる箇所があり、その下層が黄灰色または青灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は約60.6mである。

遺構検出作業は、基本的には遺構面上において実施したが、発掘区中央部分では地山上面での検出となった。

III 検出遺構

本調査で検出した主要な遺構には、溝3条(SD01～03)と性格不明遺構1基(SX04)がある。遺構の規模などの詳細については、下記の遺構一覧表の通りである。

奈良～平安時代の遺構 SD01は発掘区東側で検出した南北方向の素掘り溝で、SD02は発掘区西側で検出した南北方向の素掘り溝である。SD02の西側部分は後述するSX04に壊されているため、幅は確定できないが、埋土は数層の堆積に分かれていて、奈良～平安時代前半の土器や瓦が出土した。またSD01と02の間には、地山層と酷似した色ながら硬く締まった土質の黄灰色粘土の堆積が確認されたが、この層より遺物は出土しなかった。

室町時代以降の遺構 SD03は発掘区ほぼ中央で検出した東西南方向の溝である。西側はSX04により壊されている。遺構の重複関係からみて、前述のSD01、SD02より新しく、SX04よりは古い。埋土からは鎌倉時代の瓦器のほか室町時代(15～16世紀頃)の土師器皿が出土した。SX04は発掘区西側で検出した性格

不明の遺構で、深さ約1.4mと深く掘り込まれ、規模については発掘区外に広がり明らかではない。前述のSD02の西側を破壊するような形で掘り込まれている。埋土は数層に分かれており、概ね粘土と砂が交互に堆積している状況にあるので、南北方向の溝・溝もしくは流路のような遺構である可能性が考えられる。埋土からは江戸時代(17～18世紀頃)の陶磁器や枝瓦が出土した。

IV 出土遺物

遺物は、遺物整理箱で14箱分が出上。その内訳は、奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・軒平瓦(6712A)・丸瓦・平瓦・凸面布目瓦・刻印瓦(丸瓦玉縁端部に押捺・井〔井か〕、鎌倉時代の瓦器、室町時代の土師器皿、江戸時代の陶磁器・枝瓦、時期不明の砥石・炉壁などである。

V 調査所見

本調査で検出した溝SD01とSD02については、位置的に見て、隣接地の既調査で検出されている溝と繋がる可能性が高いとみられる。両者は3～4m程度の間隔を隔てて南北方向に並行する様相を呈しており、しかも双方ともに埋土に奈良～平安時代前半の遺物が含まれる。

こうした様相から、SD02は東三坊大路東側溝、SD01は雨落ち溝にそれぞれ比定でき、その間に大安寺西面築地が想定される。SD01と02の間において確認した黄灰色粘土の堆積土は、築地の積上もしくは版築土である可能性が高いとみられる。

また、SD02の西側は江戸時代以降の遺構であるSX04によって閉られており、こうした状況は今回の調査地の北側約40mの地点で実施した市DA第1次調査でもこの様相と類似した状況が確認されている。よって、SX04は本発掘区からさらに北方へ延び、市DA第1次調査地付近まで及んでいる可能性が高い。あるいは、大安寺の集落を画する壕とも考えられるが、最終的には今後の隣接地での調査成果を待って判断したい。

(武田和哉)

1) 奈良市教育委員会「大安寺旧境内発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和55年度 奈良市教育委員会 1981』および『奈良市教育委員会「大安寺旧境内 第37次の調査」奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和63年度 奈良市教育委員会 1989 参照。』

DA 第 111 次調査 検出遺構一覧表

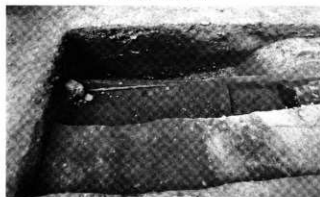
遺構番号	形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
SD01	南北溝	長さ2.5以上×幅0.8～1.2	0.1～0.2	奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・瓦	雨落ち溝
SD02	南北溝	長さ2.5以上×幅3.5以上	1.2	奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・軒瓦・瓦・刻印瓦・凸面布目瓦	東三坊大路東側溝
SD03	東西溝	長さ7以上×幅0.6～0.8	0.2～0.3	奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・瓦、鎌倉時代瓦器、室町時代土師器	
SX04		長さ2.5以上×幅3.3以上	1.4前後	奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・瓦、江戸時代陶磁器・枝瓦	



発掘区全景（西から）



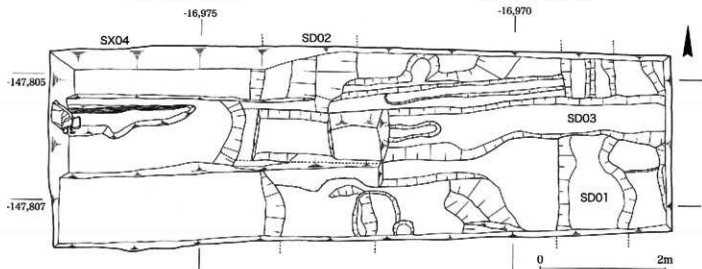
発掘区全景（北から）



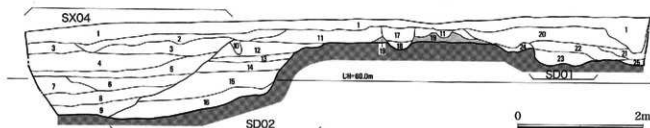
発掘区西半部（南から）



発掘区東半部（北から）



DA 第 111 次調査発掘区遺構平面図 (1/60)



DA 第 111 次調査発掘区土層断面図 (1/60)

- | | | | |
|----------------------|----------------------|---------------------|----------------------|
| 1: 造成土 | 8: 暗灰色砂質土 (S X04埋土) | 15: 暗黄褐色土 (S D03埋土) | 22: 茶褐色粘質土 (S D01埋土) |
| 2: 造成土 [石、瓦を多く包含] | 9: 暗褐色粘土 (S X04埋土) | 16: 暗灰色粘土 (S D03埋土) | 23: 暗灰色土+黄褐色粘質土 |
| 3: 暗茶灰色土 (S X04埋土) | 10: 茶褐色土 17: 茶灰色土 | 17: 茶灰色土 | (S D01埋土) |
| 4: 暗茶灰色土 (S X04埋土) | 11: 黄灰色土 | 18: 黄灰色土 | 24: 黄褐色土 |
| 5: 暗茶褐色粘質土 (S X04埋土) | 12: 茶褐色土 (S D03埋土) | 19: 黄灰色粘土 (築地横土) | 25: 暗灰色砂質土 |
| 6: 暗茶褐色砂質土 (S X04埋土) | 13: 暗茶灰色土 (S D03埋土) | 20: 暗茶灰色土 | 地山: 黄灰色または青灰色粘土 |
| 7: 暗灰色粘土 (S X04埋土) | 14: 茶褐色粘質土 (S D03埋土) | 21: 暗茶褐色粘質土 | |

DA 第 111 次調査 発掘区土層断面図 (1/60)

(3) 西面中房地区の調査 第112次

I はじめに

調査地は、大安寺の伽藍復原によると主要伽藍地区の中央西端部にあたる。当該地は西面中房列のほぼ中央に該当すると想定される。今回の調査と同じ敷地内の南半部で県1979年度第1次調査が行われており、東西南方向の基壇と南北方向の階段が検出されている¹⁾。今回の調査では西面中房の基壇や礎石据え付け穴の検出を目的に調査を実施した。

II 基本層序

層序は上から造成上、茶黄色土・茶灰色土混合土、黒色炭土、暗茶灰色土、黄茶色粘質土、暗灰褐色砂質土と続き、現地表下0.5mで凝灰岩粉末層にいたる。遺構は茶黄色土・茶灰色土混合土上面と凝灰岩粉末層上面で検出した。遺構検出面の標高は、茶黄色土・茶灰色土混合土上面が概ね61.5m、凝灰岩粉末層上面が61.1mである。

III 検出遺構

茶黄色土・茶灰色土混合土上面で東西南方向の溝SD01と南北方向の溝SD02を検出した。SD01は幅0.8m、深さ0.7mで、SD02は幅1.8m、深さ0.3mである。いずれも18世紀の遺構である。重複関係からSD01が新

しい。この茶黄色土・茶灰色土混合土から0.4m掘り下げると、凝灰岩を砕いて敷き詰めたような層(17)があった。この層は隣接地で行われた市DA第68次でも確認されている²⁾。凝灰岩層の厚さは2cm程度である。この上面で小穴を検出し、埋上から土師器が出土したが、小片で時期を特定できない。

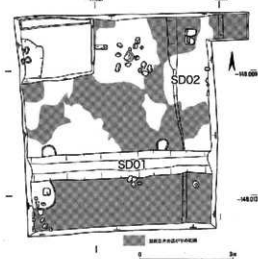
IV 出土遺物

遺物整理箱32箱分の遺物が出土。古墳時代の埴輪、奈良～平安時代の土師器・須恵器、三彩・灰軸・緑釉陶器、製塩土器、軒丸瓦6304D 1点・型式不明2点、軒平瓦6712A4点、6664A3点、6661B・6664F・6716C各1点、型式不明2点、鬼瓦(南都七大寺式IV B1) 1点、埴、鎌倉時代の瓦器、江戸時代の陶磁器、時期不明の埴輪、窯体片がある。

V 調査所見

今回の調査では、西面中房の遺構は検出することができなかった。県第1次調査で検出された基壇や階段との関りや凝灰岩粉末層の性格を含め、今後の周辺の調査に委ねたい。(池田裕英)

- 1) 奈良県教育委員会「大安寺旧境内発掘調査概報(79-1次)」「奈良県遺跡調査概報1979(第二分冊)1979
2) 「史跡大安寺旧境内(第68次)の調査」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」平成7年度 1996

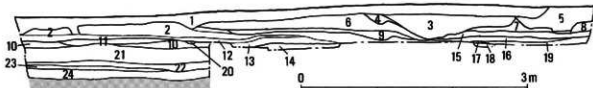


DA第112次調査 発掘区遺構平面図(1/125)

W -17.927 -17.924 E
L.H: 62.0m



発掘区全景(北東から)



- 1: 造成土 6: 茶黄色土・茶灰色土混合土 11: 暗灰褐色砂質土(凝灰岩片含む) 16: 灰褐色土・暗茶灰色土混合土 21: 暗茶黄色土・暗灰褐色土混合土
2: 暗茶灰色土 7: 淡茶褐色土・暗茶黄色土混合土 12: 淡黒色炭土 17: 凝灰岩粉末層 22: 灰褐色砂質土
3: 黒色炭層 8: 茶褐色土・暗黄茶色土混合土 13: 黄茶色粘質土 18: 暗褐色土 23: 暗茶黄色土・灰褐色砂質土混合土
4: 淡茶褐色砂質土 9: 黒色炭土 14: 暗灰褐色砂質土(マンガン含む) 19: 暗褐色土 24: 灰褐色土
5: 暗茶褐色土 10: 暗灰褐色土 15: 淡灰褐色土 20: 茶灰色土 地山: 暗茶黄色粘質土(トーン部分)

DA第112次調査 発掘区北壁土層図(1/50)

(4) 苑院地区の調査 第113次

I はじめに

調査地は、大安寺旧境内の伽藍復原によると苑院推定地の南辺ほぼ中央部にあたり、現在は農業用溜池（芝池）の中に位置する。調査地周辺では、芝池の東側で過去に数度の発掘調査が行われており¹⁾、奈良時代の掘立柱建物や欄列、溝、11世紀の土坑を検出している。

今回の調査では、芝池の南堤が苑院の築地を踏襲している可能性も考慮し、池の南岸沿いに設けた東西方向の発掘区（南発掘区）と、東岸沿いに設けた南北方向の発掘区（北発掘区）の2箇所の発掘区を設けて調査を行った。

II 基本層序

北発掘区 基本的な層序は、表土である黄灰色粘質土以下、暗茶褐色腐植土、暗灰褐色粘質土、灰褐色粘土と続き、現況地盤（池底）から0.6m下で青灰色砂礫の地山にいたる。遺構検出はこの地山上面で行った。地山上面の標高は61.6mである。

南発掘区 基本的な層序は、上から暗茶褐色腐植土、茶黄色砂質土、灰褐色粘土と続き、現況地盤（池底）から0.1～0.6m下で茶黄色粘土もしくは青灰色砂礫の地山にいたる。遺構は茶黄色粘土上面で検出した。地山上面の標高は61.8～62.6mで、南から北にむかって下っている。発掘区南半部でのみ遺構面である茶黄色粘土が残っていた。

III 検出遺構

北発掘区 検出遺構はない。本調査地から西約50mのところで実施した市DA第29次調査での遺構検出面（地山上面）の標高が63.0mであり、今回の調査の地山上面がそれより約1.4m低いことから、遺構面は削平されていると考えられる。現在の泉道木津横田線をつくる際に芝池の池底を掘って、その土を運んだとされ、遺構面はおそらくその際に破壊されたものと思われる。



北発掘区全景（北東から）

南発掘区 検出した遺構は、江戸時代の土坑（SK03）、時期不明の溝（SD01）、土坑（SK02）を検出した。発掘区南半で遺構面が残ることから、発掘区を南へ拡張して遺構検出を行ったところ、拡張区の東端部で奈良時代の瓦を含む溝SD01が検出できた。苑院南面築地北側の雨落溝の可能性も考えたが、西端部で土坑SK03があるため、溝が東西方向に続くかは不明である。溝、土坑からは奈良時代の瓦が出土したが、小片のため詳細な時期は不明。

IV 出土遺物

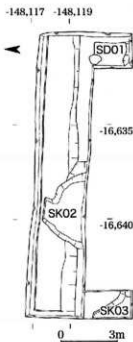
北発掘区からは遺物が出土せず、南発掘区から遺物整理箱2箱分の遺物が出土。遺物には奈良時代の土師器・須恵器、丸・平瓦や平安時代以降の軒丸瓦、鎌倉～室町時代の青磁、軒平瓦、江戸時代の陶磁器がある。

V 調査所見

今回の調査結果から、芝池の中は池の掘削によって遺構面が残っていない可能性が高いことがわかった。

（池田裕英）

- 1) 奈良市教育委員会「大安寺旧境内発掘調査報告81-1次」、『奈良市歴史文化財調査報告書昭和56年度』1981、同「史跡大安寺旧境内の調査83-3次調査」、『奈良市歴史文化財調査報告書昭和58年度』1983、同「史跡大安寺旧境内の調査第29次調査」、『奈良市歴史文化財調査報告書昭和62年度』1987



DA第113次調査 南発掘区
遺構平面図 (1/200)



南発掘区全景（東から）

22. 成務陵古墳陪塚ろ号隣接地の調査 第2次

事業名	個人住宅新築	調査期間	平成17年7月5日～7月12日
届出者名	個人	調査面積	28㎡
調査地	奈良市山陵町318番1、319番1	調査担当者	池田裕英

I はじめに

調査地は、成務陵古墳の北側で宮内庁が管理している成務陵陪塚「ろ号」（一辺約20mの方墳）の東に隣接する場所である。成務陵陪塚ろ号隣接地では、平成5年に本市教育委員会が発掘調査を行っているが、遺構、遺物はなかった¹⁾。今回の調査は南北2箇所に発掘区を設けて行った。

II 基本層序

北発掘区の層序は、上から造成土、黒灰色土（旧耕土）、灰褐色土、赤褐色砂質土、暗赤褐色土、暗黄褐色土と続き、現地表下約2.9～3.1mで暗黄褐色土の地山にいたる。地山上面の標高は84.9～85.1mである。地山上面は南から北に向かって下っている。

南発掘区の基本的な層序は、上から造成土、灰白色粘質土・茶褐色土混合土、茶褐色土、灰褐色土、暗黄褐色土と続き、現地表下約1.9mで黄褐色土の地山にいたる。地山上面の標高は、概ね86.5mである。

III 検出遺構

両発掘区とも検出遺構はなかった。

IV 出土遺物

両発掘区とも出土遺物はなかった。

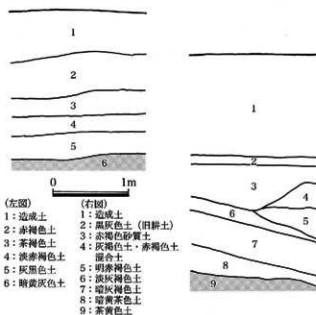
V 調査所見

今回の調査では陪塚に関わる遺構はなく、遺物も出土しなかった。両発掘区の南北間の距離は約10mであるが、この間に地山上面の標高差が約1.5mあることから、この場所が東南から北西にむかって急激に下る地形であったことがわかる。（池田裕英）

1) 「成務陵古墳陪塚ろ号隣接地の調査」奈良市埋蔵文化財調査報告書、平成5年度 1994



S N
LH:89.0m



SM第2次調査 南発掘区(左)・北発掘区(右)西壁土層断面図 (1/50)



北発掘区全景 (北から)



南発掘区全景 (西から)

23. 歌姫赤井谷第3号横穴の調査 第1～3次

歌姫赤井谷横穴群発掘調査一覧表

通称名	調査回数	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
歌姫赤井谷横穴	UA01	歌姫赤井谷986-2	H15.01.30～02.19	750㎡	池田博
	UA02		H16.02.01～03.03	28㎡	池田博
	UA03		H17.08.01～10.20	44㎡	池田博・横野治三(奈良大学文学部)

I はじめに

歌姫赤井谷横穴群は、奈良市歌姫町字赤井谷に所在し、歌姫町から山陵町にかけて東西にのびる奈良山丘陵南端部に位置する。

奈良山丘陵には、古墳時代前期の佐紀石塚山古墳・佐紀陵山古墳といった大形の前方後円墳や古墳時代中期の塩塚古墳・オセ山古墳などの中規模古墳をはじめ多数の古墳が存在し、佐紀古墳群を形成している。歌姫赤井谷横穴群は、このような地域の中に造られた古墳時代後期の横穴群である。

歌姫赤井谷横穴群は、昭和29年に土地所有者が当該地の土を採取していた際に偶然発見されたもので、通報をうけた奈良県教育委員会が同年2月に1号横穴の発掘調査を行っている¹⁾。玄室部分のみが調査され、奥行き5.5m、奥壁幅1.88m、高さ1.85mであることを確認した。玄室床面には埴輪片を敷きつめている。その上に土師貫亀甲形陶棺が2基置かれ、棺内には人骨が残っていた。副葬品には土師器、須恵器、耳環、鹿角装子などがある。2基の陶棺の年代は、6世紀後半と考えられている²⁾。

1号横穴の西側に南に開口した穴があり、2号横穴と報告されているが、今回の調査で土地所有者が戦後に農作物を貯蔵するために掘った穴であることがわかり、横穴ではないことが明らかとなった。

発掘調査を行った3号横穴は、平成15年5月に土地所有者が1号横穴の南西で陥没した穴を発見したのを契機に、奈良市教育委員会と奈良県教育委員会が現地を訪れ、新発見の横穴であることを確認したものである。このため、奈良市教育委員会から遺跡の移動届を提出し、本横穴は平成15年6月11日付の通知をもって「歌姫赤井谷横穴3号墳」とされた。

II 調査の経過

第3号墳(以下、3号横穴とよぶ)に関して、天井部が崩落する危険性もあるので、土地所有者から早急に発掘調査を行い、埋め戻してほしいという依頼があった。奈良県教育委員会と協議を行った結果、発掘調査を実施し、保存対策を講じることとなった。

第1次調査 発掘調査に先立ち、まず第1次調査として平成15年度に現地の地形測量を行った。トラバース



UA第1～3次調査地 位置図(1/5000)

を組み、20cm間隔の等高線で、1/100縮尺の測量図を作成した。現地では、顕著な土採りの跡が4箇所認められた。土採り跡から南側の等高線は直線的で間隔もほぼ等しく、採取した土砂で整地された可能性があり、横穴が造られた頃の地形はかなり改変されていると考えられる。また、南に開口した穴もみつかリ、新発見の横穴ではないかと思われる。

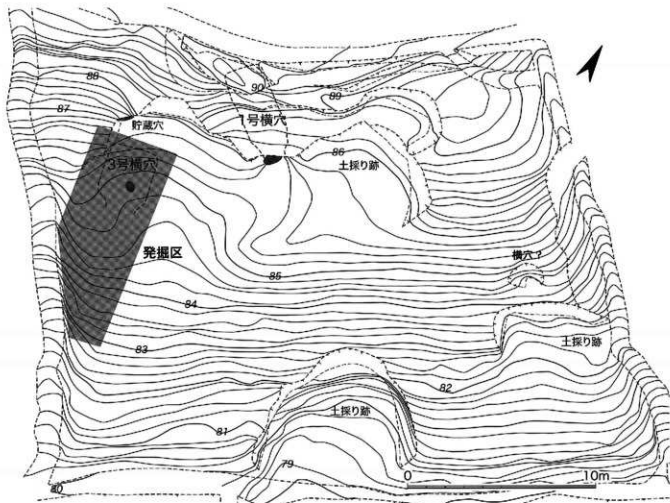
地形測量とあわせて、1・3号横穴の主軸方向を調査し、1号横穴は東南方向に、3号横穴はほぼ方位にあった南北方向を主軸とすることが判明した。

測量調査の結果、3号横穴は土採りされた部分にあり、上部が削られたために天井部が崩落し、開口したものと考えられる。開口部は、竹の根により支えられて天井部が保たれているようにみられた。

第2次調査 平成16年度に行った第2次調査は3号横穴の平面規模を知ることが主目的として、崩落の危険性がある玄室部以外の部分で発掘調査を行い、あわせて1・3号横穴の遺構養生作業を行った。調査中、天井部に新たな陥没部分ができ、そこから玄室内を観察することができた。その結果、奥壁・側壁は築造当初の壁面の大部分が、天井部はすべて崩落していることがわかった。よって、3号横穴の玄室内は横穴築造当初の姿をほとんどとどめていないと判断された。崩落した土は玄室内に堆積していた。

1号横穴については、開口部の周辺が土採りによって大きくえぐりとられており、崩落する危険性があったため、土のうを積んで開口部をふさぎ、立ち入れないように養生を行った。

第3次調査 過去2度の調査成果をもとに安全対策を



歌姫赤井谷横穴群1～3号横穴付近地形測量図 (1/200)

行った上で、第3次調査として平成17年度に羨道と玄室の発掘調査を奈良大学文学部文化財学考古学研究所との合同で実施した。

III 調査の概要

以下では、横穴各部分の名称について、遺骸を埋葬した空間を玄室、玄室への入り口部分を玄門、玄門にいたるトンネル状の通路部分を羨道、羨道入口部分を羨門、天井のない羨道前面を前庭として記述する³⁾。

1. 基本層序

発掘区内の層序は、上から灰褐色腐植土、暗茶褐色土、灰褐色土と続き、現地表下0.6～1.0mで暗黄茶色砂礫の地山にいたる。地山の砂礫層はいわゆる大阪層群とよばれる軟弱な地盤である。この地山上面から掘り込まれた横穴の前庭を検出した。前庭床面上面の標高は約81.9mである。前庭から羨道の発掘は、遺跡が壊される危険性がないことから東半部のみにとどめた。前庭から玄門にかけての堆積土の観察から、羨門が2回、土のみで閉塞されていることが判明した。

土層図の(1)は1度目の閉塞土である。この土を掘って追葬した後、再び閉塞している(2a・2b)。このうち2a層は、1度目の閉塞土の上を覆っている。閉塞

に使った土は、砂質土や礫混じりの土で、地山の土を用いたものである。2度目の閉塞後、羨門と閉塞土の隙間に(3)の地山の崩落土が堆積している。玄室内の堆積土(4)は天井、壁面の崩落土である。(5)の層は地山の前庭壁面からの地山崩落土である。

また、横穴をつくる際に、前庭の南側が急斜面であったためか地山を穿った土(6)で整地を行っている。

2. 3号横穴の構造

形態と規模 横穴は地山を穿って、南北方向を主軸に作られている。天井が陥没した位置の標高は概ね85mの地点にあたる。羨道、玄室の平面形は、羽子板形を呈している。前庭の横断面形は逆台形で、幅は上部で1～1.5m、底部で1.0mである。前庭の長さ4.7mで、丘陵斜面を切り通して造られ、床面は丘陵斜面に沿って、南に下がっている。前庭南端部から須臾器の壺(83頁図版)を逆位で検出した。前庭の埋土(1)上で検出しており、玄室への埋葬・閉塞ののち、人為的に置かれたものと考えられる。羨門は幅1.0m、高さ0.8mである。羨道は長さ2.1m、幅1.1mである。玄門は幅1.1m、高さ1.4mである。形状は天井部が緩やかにカーブするアーチ形を呈する。玄室は平面長方形を呈し、奥壁幅1.9m、